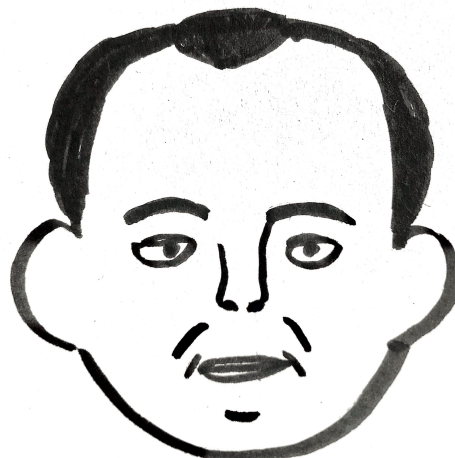
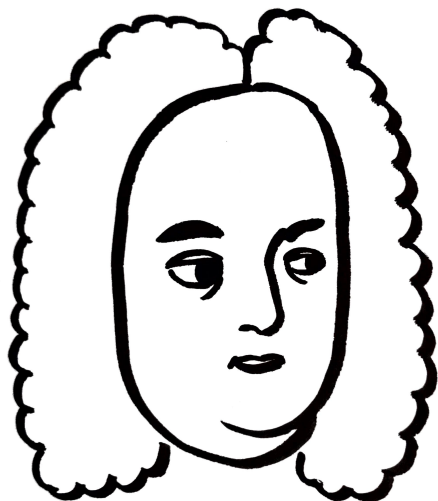




みらいつくり読書会

2020

報告書



みらいつくり大学校企画

誰だかわかりますか？

…答えは裏面→

目次

	2020年度みらいつくり読書会 課題図書一覧	…	p.1
	みらいつくり読書マップ2020	…	p.2
第1回	カフカ『変身』	…	p.3
第2回	カフカ『変身』	…	p.3
第3回	梶井基次郎『檸檬』	…	p.8
第4回	梶井基次郎『檸檬』	…	p.8
第5回	芥川龍之介『蜘蛛の糸』	…	p.14
第6回	芥川龍之介『犬と笛』	…	p.21
第7回	芥川龍之介『西方の人』 『続西方の人』	…	p.28
第8回	トルストイ『イワンの馬鹿』	…	p.38
第9回	トルストイ『イワン・イリッチの死』	…	p.46
第10回	カレル・チャペック『ロボット』	…	p.54
第11回	カレル・チャペック『ロボット』	…	p.64
第12回	ヘルマン・ヘッセ『クヌルプ漂泊の魂』	…	p.75
第13回	サン・テグジュペリ『星の王子さま』	…	p.86
第14回	ソポクレス『オイディプス王』	…	p.98
第15回	シェイクスピア『マクベス』	…	p.110
第16回	シェイクスピア『お気に召すまま』	…	p.123
第17回	アンデルセン『絵のない絵本』	…	p.137
第18回	ディケンズ『クリスマス・キャロル』	…	p.151
第19回	スウィフト『ガリヴァー旅行記』	…	p.165
第20回	ジョージ・オーウェル『動物農場』	…	p.179
第21回	トマス・モア『ユートピア』	…	p.194
第22回	ジョセフ・コンラッド『闇の奥』	…	※
第23回	エイモス・チュツオーラ『やし酒飲み』	…	※

※第22回、第23回の記録はみらいつくり研究所ホームページにて公開予定

みらいつくり読書会(2020年度)

実施日

第1回	2020/4/24	第9回	2020/7/31	第17回	2020/12/1
第2回	2020/5/1	第10回	2020/8/19	第18回	2020/12/14
第3回	2020/5/8	第11回	2020/9/9	第19回	2021/1/4
第4回	2020/5/29	第12回	2020/9/23	第20回	2021/1/18
第5回	2020/6/5	第13回	2020/10/8	第21回	2021/2/1
第6回	2020/6/12	第14回	2020/10/19	第22回	2021/3/1
第7回	2020/6/26	第15回	2020/11/2	第23回	2021/3/22
第8回	2020/7/10	第16回	2020/11/16		

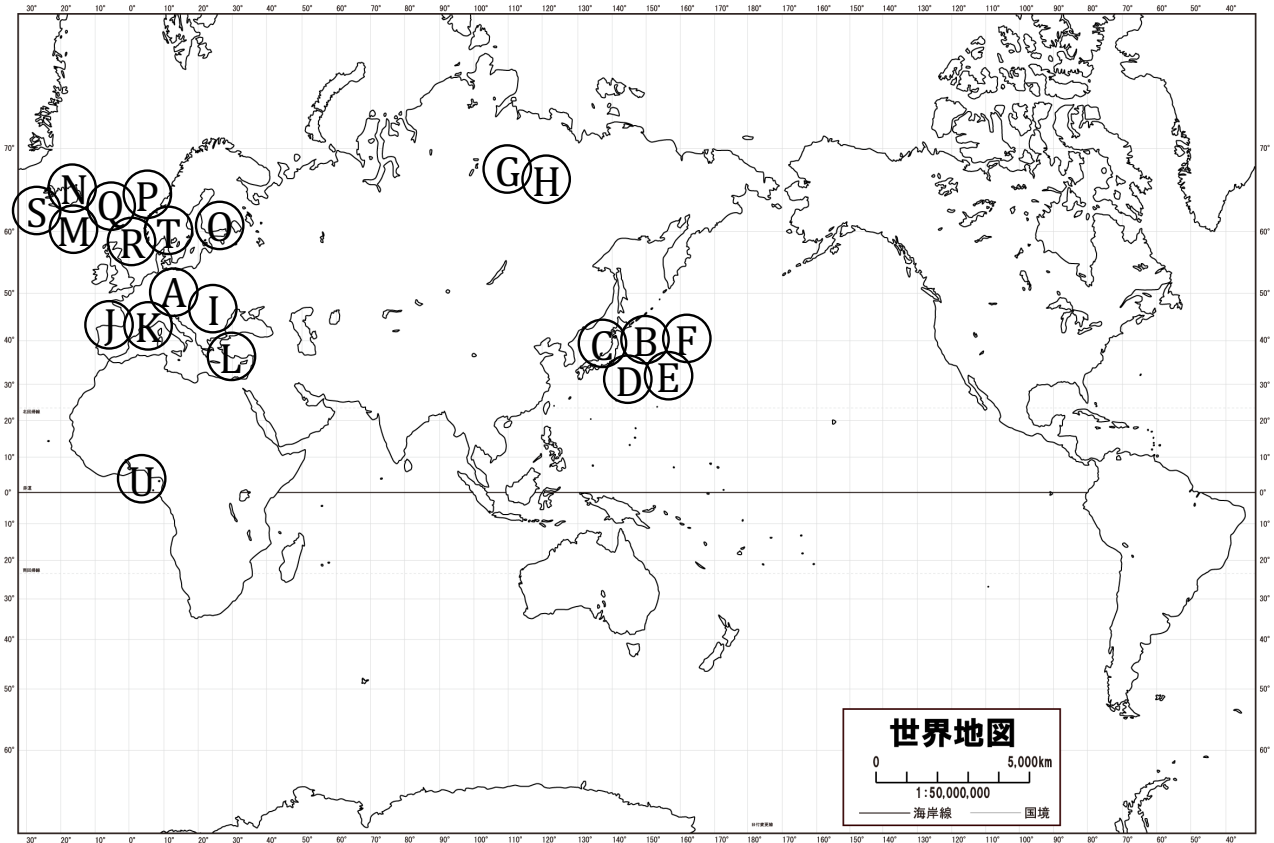
課題図書一覧


開催	作品	記号	発行年	区分
第1回	カフカ『変身』	A	1915年	ドイツ文学
第2回	カフカ『変身』	A	1915年	ドイツ文学
第3回	梶井基次郎『檸檬』	B	1925年	日本文学
第4回	梶井基次郎『檸檬』	B	1925年	日本文学
第5回	芥川龍之介『蜘蛛の糸』	C	1918年	日本文学
第6回	芥川龍之介『犬と笛』	D	1919年	日本文学
第7回	芥川龍之介『西方の人』	E	1927年	日本文学
第7回	芥川龍之介『続西方の人』	F	1927年	日本文学
第8回	トルストイ『イワンの馬鹿』	G	1886年	ロシア文学
第9回	トルストイ『イワン・イリッチの死』	H	1886年	ロシア文学
第10回	カレル・チャペック『ロボット』	I	1920年	その他の国の文学
第11回	カレル・チャペック『ロボット』	I	1920年	その他の国の文学
第12回	ヘルマン・ヘッセ『クヌルプ漂泊の魂』	J	1915年	フランス文学
第13回	サン・テグジュペリ『星の王子さま』	K	1943年	フランス文学
第14回	ソポクレス『オイディプス王』	L	紀元前427年	その他の国の文学
第15回	シェイクスピア『マクベス』	M	1606年	イギリス文学
第16回	シェイクスピア『お気に召すまま』	N	1600年	イギリス文学
第17回	アンデルセン『絵のない絵本』	O	1839年	その他の国の文学
第18回	ディケンズ『クリスマス・キャロル』	P	1843年	イギリス文学
第19回	スウィフト『ガリヴァー旅行記』	Q	1726年	イギリス文学
第20回	ジョージ・オーウェル『動物農場』	R	1945年	イギリス文学
第21回	トマス・モア『ユートピア』	S	1516年	イギリス文学
第22回	ジョセフ・コンラッド『闇の奥』	T	1899年	イギリス文学
第23回	エイモス・チュツオーラ『やし酒飲み』	U	1952年	その他の国の文学

読書マップ

英雄と伝説	ルネサンスから啓蒙主義へ	ロマン主義と小説の台頭	現実の生活を描く	伝統を破壊する	戦後の文学	現代文学	
紀元前3000年 ～後1300年	1300年 ～1800年	1800年 ～1855年	1855年 ～1900年	1900年 ～1945年	1945年 ～1970年	1970年 ～現在	
J K							フランス文学
S N M Q P T R							イギリス文学
A							ドイツ文学
G H							ロシア文学
C B F D E							日本文学
L O I U							アメリカ文学
L O I U							その他の国の文学

〈参考図書〉 横軸：ジェイムズ・キャントンほか著『世界文学大図鑑』三省堂
縦軸：足立直子ほか監修『プレミアムカラー国語便覧』数研出版





参加者求む

みらいつくり大学校
みらいつくり読書会@zoom
第0回

※今回はプレ実施のため、参加者を限らせていただきます。

【日時】

- ①2020年4月24日(金)10:00～11:00
- ②2020年5月1日(金)10:00～11:00

【課題図書】

フランツ・カフカ『変身』
(「世界文学大系58 カフカ」筑摩書房)
1960(昭和35)年4月10日発行

※青空文庫で読めます。

参加希望の方は、以下の事務局までメールでご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。
※進め方やグラウンドルール等、読書会を続けながら必要な
整備を進めていきます。不完全さを楽しむ気持ちで参加してく
ださい。

事務局：みらいつくり研究所 松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

第1回、第2回みらいつくり読書会@zoom 記録

事務局 みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
カフカ『変身』	①2020/4/26 10:00～11:00	①A,B,C,D,E
	②2020/5/1 10:00～11:00	②B,C,D,F,G

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：ひたすら気持ち悪い。後半開けてくる感じがある。

B：中途障害について考えながら読んだ。不条理さについて。最後に語り手が変わるのが面白い。本人が死んで、残った人たちが未来が見えてきたような話。何とも言えない不気味さ。語り手の人生が終わったけど、周りの人は続いていくような。

C：いろいろな方向から考えられる本だと思った。愛する人が、自分の許容範囲のもので無くなってしまったら、と考えた。

D：身体感覚と精神感覚がズレているように思った。（物語が進むにつれて）心が身体に寄っていく様に感じた。死が描かれる時に、誰が語っているんだろうとなる。

E：虫の描写が鮮烈にあるにもかかわらず、日常のことばかりが描かれる。

B：本人の死と家族から見た死。ズレている。個人の死と、社会的な死について。人が死んだ後に社会的な死がくる場合もあるし逆の場合もある。

B：主観で書く？客観で書く？

E：第三者が見たように客観的に書く。客観的に書くと記事に体温を感じられないことが多い。やはり主観で、私はこう思うと言うように自分の立場をきちんと示して書いたほうが、思いがあるので、そこで体温のある文章に繋がる。客観は冷静に分析する上で大切なんですけど、一方で逃げられるというか。自分が責められない立場から安全なところから論ずることができる。主観で語ることは責任が生じる。「それは違うだろ」ってもろに自分が受け止めなくてはいけない。主観で書く覚悟が必要。

B：医者も同じようなところあって。私はこう思いますというより、～とされています、～と言われてますね、とか、医学界みたいなものを主語に立てて、こう言っていますのように半ば逃げているときあります。

E：そういう大きな主語を使う時ってずるくできる。

D：私は客観はあり得ないと思っています。完全な主観もないのかもしれないけれど。割合の問題なんだろうけれど。責任を個人に還元する事ができないのではないかとこの私で考えている事です。

A：「誰が」と言い切れない部分ってある。でも人間は「誰が」が好きだから。そこを見えるようにすることは、人間の欲求を満たすのかもしれない。でも本質的な解決には至っていないというのを感じます。家具を片付けるという行動に注目した。本当にそれはグレゴールが求めていたのか、わからない。グレゴールはしがみつく。妹は困っている人を助けたいと思っている。そしてする行動がグレゴールを追い詰めていくことにつながっていく。そこに妹の責任はあるのではないかと思う。教師としても、生徒にしていることは、求

められているのか、追い詰めているのではないか、そう思うこともあります。

C：私が家族に対して良かれと思ってやっていることも実は家族にとっては違ったりすることもあるのかもしれない。

D：グレゴールは一人で働いていた。家族を養っていた。役に立っていることが嬉しかったと。グレゴールの目線から見たケアの矢印も、この中には描かれているのではないか。ケアを媒介にして、グレゴールと妹の関係に焦点を当てて変化を見てみる。

A：グレゴールの不自由さはだんだん減っていく。そして妹のケアは増えていく。そして死に至る。妹のケアが死につながっているのではないかと思う。そして家族はハッピーになる。

B：ケア関係そのものではないよね。少しは関係もしているけれど。関係性の変化にフォーカスして読むよりは、関係性がある、そこでそれぞれの主観がどのように変わっていくのかということの方が面白いような気がする。

E：不条理との向き合い方が変化しているのでは。

【議論①で至った問い（視点）】

「グレゴールとグレーテの不条理に対する反応は、どのように変化しているのだろうか。」

【議論②で出た意見】

C：グレゴールは最後には音楽を楽しむ虫になっていたように思う。妹が力を身につけていく。二人はそうやって変化していったと読んだ。

D：注目したのは、りんごの爆撃を受けた後のシーン。私は最後まで自己中心も他者への気遣いも残ったままであると読んだ。例えば、引き受けてやろうと思いつつ、大きな怒りを感じている。気遣いをしながら大きな怒りをもつという大きな矛盾を抱えている状態が、グレゴールの死という不条理に対する態度だったのではないかと思った。最後死ぬシーンで、身体が動かなくなったことを心で感じる描写がある。身体と心の感覚が一致してきているということかもしれない。近づいてはきたが一致はしきっていない。死ぬ直前に書いてあるのは「空虚な満ち足りた状態」とある。死に向かっていく彼の状態は大きな矛盾を抱えていた。そう読みました。

B：徐々に身体に慣れていって、なおかつ自分を客観的に見つめていく。でも単純ではない。受け入れつつ受け入れられない、そのような描写がある。最後には顧慮という言葉が出てくる。他の人間存在に対する配慮。他の人に対する顧慮が自分のプライド。でも妹は自分を家畜のように扱う。グレゴールは信頼や期待を寄せるが、妹はそうではない。私はCさんがいうように妹がだんだん成長していくというようには読まなかった。贖罪的に甲斐甲斐しく兄の面倒を見ている。でも実際は家畜のように扱っている。亡くなった後の方がずっとしている。最後は両親目線になる。「明るい夢と善意とを裏書き」とある。その転換は興味深いと思った。

F：『変身』という作品がのちに様々なものに影響を与えていることに興味がある。村上春樹の作品もカフカの『城』という作品がある。これも不条理の話。『城』という作品と『世界の終わり』と『ハードボイルドワンダーランド』はよく似ている。人気な解釈は、『城』は近代を動かすシステムであるという捉え方。村上春樹はシステムを批判したいと言った。『変身』は、形を変えて繰り返されている物語である。何かあるということ。それは言葉にすると「不条理」だと思う。人生で本質的なものは、不条理にどう反応するかで決まると思う。『変身』の秀逸なところは、問いにもあるように、グレゴールと家族の不条理に対する反応が対照的に描かれているところにある。唯一、不条理と共存

しようとしているのはグレゴール。正常性バイアスは脳が強引に正常であると取り戻そうとする働きのこと。タイタニック号が沈む船の上で椅子を整理していた人たちがいるという記録がある。異常な状態の中で正常を取り戻そうとするけれど、全体が異常なのでその行為には意味がない。グレーテと家族の反応はそれに似ている。異常な状態に正常を取り戻そうとする。そんなバイアスを働かせて異常に反応している。それは不条理の排除につながる。グレゴールは当事者であるが故に、不条理と共存することを学ばざるを得なかった。両親の視点に行くのは、両親の視点に社会の真っ当な人間たちを代弁させているように思う。やっと希望が見えたというのは、僕には絶望にも見える。そういう皮肉を最後に言っているのかと思う。唯一グレゴールが正常で、この世界が異常だった。グレゴールはそれを世界に唯一知らせる存在だったのに、それを排除したときに世界に平和がきたという異常な世界の住人が「自分たちは正常なんだ」と呟いて終わる、アイロニックな結末なんだと思った。

B：『変身』におけるシステムというのは、いわゆる日常性のことだろうか。

F：『変身』でシステムとしてメインに描かれているのは家族ではないかと思う。高齢者の介護は「この人が死ねば」と思っていたりする。そんな気持ちが一ミリもないというのは嘘になる。あとは引きこもりなどにも言えるかもしれない。グレゴールの姿そのものだろう。現代にも読まれ続けることの意味はよくわかる。

G：介護をしているときに、介護されている人が亡くなって、解放されるような感覚とか、それは患者さんに関わる場面にも、ゼロではないよと思う。本質的な問題なんだと思う。それを自分たちがどれくらい認めているのかというのは個々に差はあると思うけど。いろいろな人たちにつながる本質的な話なんだと思う。

B：正常性バイアスで言うと、逆のことがグリーフ当事者研究で言われたりする。介護を受ける人が亡くなって悲しみに暮れて食欲も出ない、と言うのは想像できる話なんだけど、逆だと言う。心は悲しみに暮れているけれど、介護するのが無くなっているから逆に食べすぎて太ると。自分としては悲しみの中に沈んでいたい、これをこそ日常にしたいと思うような気持ちがあって、それでも身体は食べ物を欲すると言う。正常性バイアスはコロナ関連のことも言われているよね。一週間二週間頑張れば、元の正常に戻ると言う人と、そうではなく新しい秩序に変わるんだって言う人がいる。その人によって問うことが全然違う。

D：変身の中で、私はどこに立っているのかと思う。不条理に対してどう立つのかと言ったような、どこに立つのかが問われているなと思った。

G：不条理とともに生きる、不条理を内包して生きることがテーマなんですね。シンパシーというか自分の中でも大切な表現だと思った。

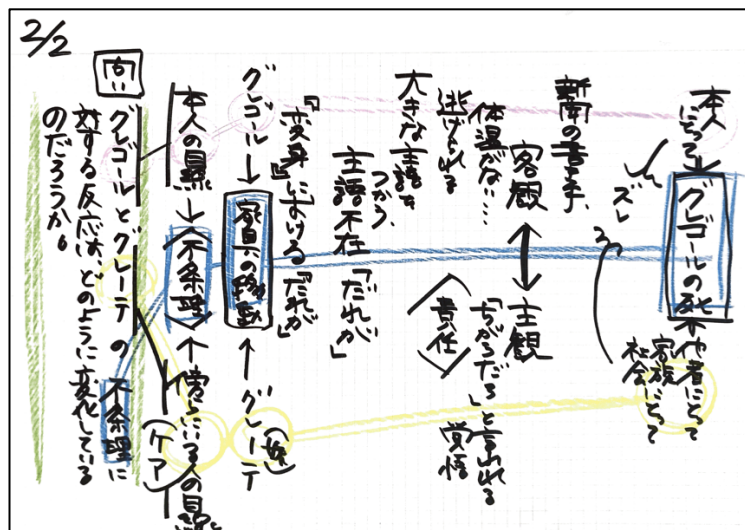
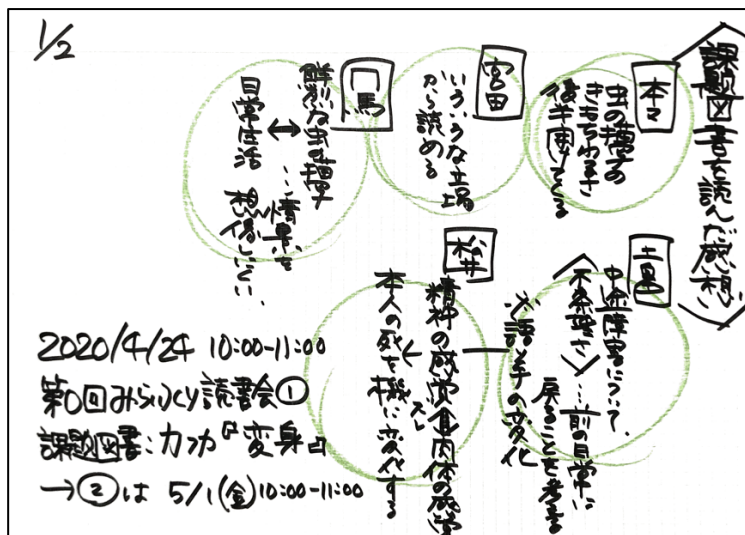
B：中途障害の人がどう読むのが気になりますね。「べてる」で言うと、精神疾患になった人たちが、自分は異常だと思っていないけれど、周りの人たちがむしろおかしいと思ったりする。

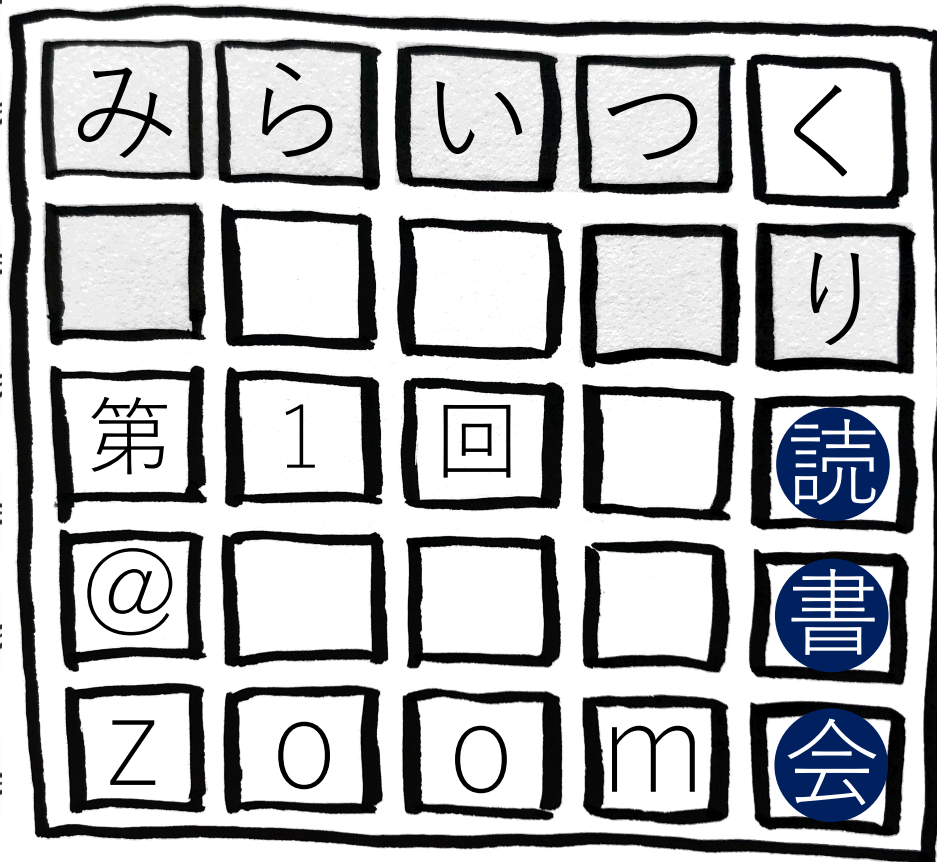
F：不条理って、近代的秩序の副産物なんだと思う。近代的秩序という背景がないと不条理って見えてこない。前近代って社会全体が不条理。社会全体がいわば不条理だったのが、近代的秩序、啓蒙主義というものが秩序や合理性で塗り固めていったときにそれでも残ってくる合理性では説明のつかないものが世の中にはあって、それを近代が勝手に不条理と呼び始めたということがあるんだと思う。言葉では表現できないもの、人間の理性ではコントロールできないもの、最たるものはウイルスとかだと思う。予想できないということが証明されている。自然を相手にしているから。人間はそれでも合理性で塗り固めようとし

たいけれども、こういうものと共存していく知恵というものが近代を抜けていくためには、獲得しなくてはいけないものだと思う。

B: 今の2020年に、近代的システムがもっと世界全体に行き渡っている世界において、全世界の人が不条理と思えるような課題を一時的に共有している。すべての人が当事者である今ののちに、カフカやカミュのような書き手のような人たちがどういう風にこれを書くのか興味があるところですね。いのちって生命とか人生とか生活とかいろいろな意味があるけど、今まさにすべての人にとっての生活における差し迫りを感じている人は誰もいなくて、さらに生命の差し迫りを感じ、就職がダメになると言ったような人生への差し迫りもあるから。いのちの差し迫りからの学びがどのように発動していくのかということについても興味がある。今までは急に障害者になったとか、急に障害者の家族になったとか、ということからの学びって言うのが発動しているし、そこからの学びって必ずあると思うんだけど。それが文学としてどう描かれるのか、それぞれがどう書くのかって言うのは関心あるなと思います。

D: この変身において時間軸も淡々と描かれているなと思った。自分が老いていくと言うような。何を悩むかによらず時間は流れていくことも描かれていると思った。時間という視点も読んでみると面白いと思いました。





【日時】

- ①2020年5月8日(金)10:00~11:00
- ②2020年5月15日(金)10:00~11:00

【課題図書】

梶井基次郎『檸檬』
(「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫)
1972(昭和47)年12月10日初版発行
青空文庫
→https://www.aozora.gr.jp/cards/000074/files/424_19826.html

【参加方法】

興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所 松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

みらいつくり大学校企画

Designed by E

第3回、第4回みらいつくり読書会@zoom 記録

事務局 みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
梶井基次郎『檸檬』	2020/5/8 10:00~11:00	A,B,C,D,E,F

内容（※語尾を中心に編集しています）

【それぞれの感想】

A：高校生の時に読んで以来好きな小説の一つです。当時、自分の心の中にある葛藤、言葉に表せないような憂鬱が書かれていると思って嬉しかった記憶があります。今でも心の中にあるような気がする葛藤、モヤモヤのようなものを感じながら読みました。

B：モノログで進みつつ、妄想が加わっていくような流れでした。所々で身体性と想像の世界とを行ったり来たりしているところが面白いなと思いました。

C：明るくユーモアが描かれている作品。最後ユーモアで終わるので気持ちが明るくなりました。

D：思い出したいくつかの映画と共通するのは、この世界を破壊したいという「破壊願望」です。破壊願望を抱えた被抑圧階級の人たちが、その怒りを、いわばテロの形によって爆発させています。

E：基本的に精神状態は高揚していきませんが、危うさがあります。ユーモアがあって回復したというよりは、鬱状態から極まって躁状態になって終わるというように読みました。闇を抱えたままの終わり方だと思いました。「二重写し」と「矛盾」がキーワードだと思いました。「Aを見ながらBを思う」という「二重写し」。現実と妄想を重ね合わせていることが、身体の弱まりを表しているのかと思いました。「矛盾」は、みすばらしいけど美しいといったことです。最後の一行で妄想世界が現実世界に転化されているのではないか、と考えました。

F：文章全体を通して、詩的な文章だと思いました。でも、檻のように心に溜まっているものは何なんだろうとまだ言語化できていません。つまりこれは「重さ」なんだと思う文章がありました。心理的な重みのようなものを感じ、最初に出てくる「得体の知れない不吉な塊」と繋がっているのかなと思いました。

【感想を重ねる】

E：病気という「身体性」と、醒めた「自意識」について気になっています。身体の調子が悪い自分のことを上空から眺めているような視点があります。その乖離が面白いと思いました。最後は無駄が削ぎ落とされているような文体に変化していました。

D：前半に「びいどろ」とあり、後半には「檸檬」が出てきます。びいどろのおはじきと、檸檬が、彼にとっては同じものなのではないかと思いました。それぞれが熱を放散させています。主人公は最後に自分の破壊願望を檸檬に託します。いわゆる「冷たい固体」を通して、自分の中の熱を逃すというか、そういうモチーフが繰り返されるのが印象的でした。また、檸檬は元々日本にはなかったものです。びいどろも外来のものです。一方で街は京都。日本的なるものと、外来のものとの対比が面白かったです。そして自分の熱を逃すのは、外来のものでした。

E：そうすると「丸善」は外来のものでしょうか。

D：「丸善」が何の象徴なのかは大切ですね。僕は資本主義というシステムのことかと考えました。

E：「近代知識人主義」みたいなものかもしれませんね。「教養主義」というか。

F：今自分が「貧困」な状況にあることに対比されて、「富」の象徴かもしれませんね。

E：「丸善」はキーワードでしょう。丸善だけが「かつては好きだった」ものとしてあります。

C：主人公は身体がつらくて、鬱々として負の感情がいっぱいある。たった一つの檸檬を持つことで、気持ち前向きに変わったり、最近行けていなかった丸善に行こうとしたりしています。そして最後本を読んだけど、やっぱりつまらないと思って檸檬を置いて出ました。その時に「爆発したら面白いのに」とユーモアを思います。人間は鬱々した感情とか、身体が辛かったとしても、たった一つで変わるんだということ表現しているのかなと思いました。たまたま主人公にとっては檸檬だったけれど、不安な感情とか鬱々とした感情を持っていない人はいません。自分にとっての檸檬って何だろうと思って読みました。落ち着かない時に持つもの、必要なユーモアって何だろうと思いました。

B：丸善が資本主義システムかどうかはわからないけれど、丸善と果物屋、かつて自分がいた世界と今の自分がいる世界、それらを二項対立させて考えてみると楽しいかなと思いました。檸檬自体は、丸善側にあったものです。でも今では八百屋に置いてある。今、自分は買い物を果物屋や八百屋でしかできません。そこで買った檸檬、かつて丸善側にあった檸檬を手にして、丸善側の象徴としての美術本の上にあえて置いて、それが爆発すると考える。活動写真は洗練されてはいないだろうと思います。洗練されているものとそうでないものの二項対立を唯一媒介した「檸檬」と考えるのは飛躍しすぎているでしょうか。

A：高村光太郎のレモン哀歌には「トパアズいろの香気」とあります。病気の妻が生きていることをその香気が思い返させる、というような詩です。檸檬はとっても酸っぱくて刺激的で、身体性に関わる果物だと思います。二項対立を媒介しているのが檸檬だということかなと思いました。

E：かつて自分が好きだった世界と、今好きな平凡な街並み。そのかつて好きだったものの上に檸檬を置くってというのは、自分がかつて憧れていた西洋近代、教養主義の上に、身体性のものを置くと読めないでしょうか。

B：主人公は「丸善」ではない方を好きなのでしょうか。僕は逆だと思います。そちらへの憧れを捨てられないまま自分は別な方に居ざるを得ない。だから自分が憧れている、手に入れたかったものを、あえて破壊するのだと思います。実際には破壊していませんが、憧れを捨て去ったかのように捉えることのできる行為をして、そのまま去っていく。

E：「なぜ丸善か」ということです。もう嫌いだったら行かなくていいのに、檸檬を持ってテンションが上がったら行くのなら、まだ未練があったのだと思います。

B：未練というか、強がっている人のモノローグに見えました。「心惹かれないですよ」と言いながらそうではないと思います。

F：この文章全体で色にこだわっているのかなと思います。過去、まだ自分に余裕があったときの世界は色彩に溢れています。現在、貧しい生活に陥った時には、一切色がありません。何となく手にした「レモンエロウ」だけが、白黒の中に唯一際立って見えるものとして彼の手の中にあります。丸善の世界にごちゃごちゃに積み重なった美術書、きっと彼の中にはグレーのように入り乱れている色の上に「レモンエロウ」を置いてきたという、その色による自分の意思表示がある、そんな感じがしました。

E：檸檬のことを「レモンエロウを出したような」とあるのが不思議だと思いました。檸檬だから、檸檬色に決まっているのに。檸檬の描写がくわしくあります。重さ、匂い、五感で書いてある。でも、最後には「黄金色」と飛躍した妄想世界が描かれています。黄金色の爆弾がくると。具体性と飛躍が面白いと思いました。

B：昨日たまたまハイデガーの関連本、現代思想の特集を読みました。その中にハイデガーと梶井基次郎を比較している論文がありました。「『器乐的幻覚』から『哲学的幻想』へ」。ハイデガーと梶井基次郎が活躍した時代はほぼ一緒です。『器乐的幻覚』では、檸檬と対照的に、音にフォーカスしています。西洋から来たオーケストラの音を主人公は音楽館で聞いているけれど、その前に日本的な雅楽を聞いているシーンがある。それは先ほど言っていたような、西洋近代的なものとは日本土着のものに置かれて、想像力を使って何かを構想するということです。場合によってはそれが幻想だったり幻覚だったりする。それが梶井基次郎の文学の特徴で、その根底にあるのが、西洋近代的なものの裏側にある、近代性や合理性では説明しきれない「存在不安」であると。「存在不安」が感覚を通して書かれているとこの論文にはあって、なるほどなと思いました。ハイデガーの言った根本概念「世界」「孤独」「有限性」。確かに梶井基次郎も近い言葉を使っています。梶井基次郎はハイデガーのことを知らなかったらうけど、同時代的にパラレルに同じ様なことを扱っていたのではないかと書いてありました。

【問いに向かう議論】

A：キーワードになりそうなのは、「二項対立」、そして「それを媒介しているもの」でしょうか。

E：二項対立を重ねると面白そうですね。縦軸と横軸に。幻想世界と身体性、日本的なものとは西欧世界と。二項対立が二つあります。

B：四象限にするということですね。

D：私は「救済」が、描かれているのではないかと思います。救済のあり方についてです。破壊というのはその一つです。破壊願望は、先ほど言った映画にも描かれています。客観的には救済ではありませんが、主観的には救済の一つだと思いました。二つの二項対立で言うと、日本的な京都の風景みたいなものは、美しいのですが、どこかで閉塞感がある。丸善という外来のものにも、彼は救いを見いだせていない。身体性というのは絶望的なわけです。最後に救済として「破壊」と「ユーモア」が著されています。Cさんが「ユーモア」と話していたけれど、一つ類の破壊願望ってどこかユーモラスです。そういうことを何か妄想していること自体がユーモラス。スガシカオの歌詞もそんなことが多い。また、又吉直樹が檸檬を好きだという話があります。又吉直樹のギャグってこういう世界観です。太宰とか梶井基次郎の世界観のギャグ。演じる人の内面は相当イカれているが、そういったことを笑うと言う構造になっています。破壊願望としての救済でありながら、ユーモアの救済を見出そうとしていると言うか、一つの救済の形として、「破壊」と「ユーモア」がここにあると思います。

F：シュールな笑いですね。

D：シュールですね。だから、この世の中にも自分の将来にも希望が持てない時に、最後に逃げ込む場所としてシュールなユーモアがあると思います。自分を笑うしかないというユーモアです。

E：四象限の縦軸のうち、上の方に、幻想世界、破壊、ユーモアが入ってきますね。最後の一行が気になります。想像の世界だけではなく、現実の世界に降りてきたという様な書き方なのではないでしょうか。「活動写真」は現実世界に戻ってくるという発想なのではないでしょうか。

B：写真自体が幻想だと思います。映画は幻想です。幻覚を表現したものです。それを看板にしています。他の人が書いた様な絵。映画という幻想を、誰かの絵という身体性を通して、看板にする。看板としていろいろな形に表されています。それもユーモアです。そんな街に戻っていく、そうせざるを得ないです。相変わらず友人の家を泊まり歩かし、相変わらず病気は治っていないし、お金はないから。

E：これは一種の回想小説ですよ。 「その頃の」ともある。過去を語っています。ユーモアで救われたならば『檸檬』を語っている時点の私は、すでに救われているのでしょうか。

B：これで終わりではないところも面白さだと思います。「また見に行くのかな」とか。爆破されているか確認しに行くのか、さらにもう一つ檸檬を持っていくのか。もちろん世界は元に戻っているだろうし、何も変わっていないですけど。この後この人どうするのかと思いました。

D：又吉さんはエッセイに、「『檸檬』を読んでから実際にやった」と書いていました。缶コーヒーなんかを団地に置いて、爆発すると思ひ込む。二時間くらいすると脂汗が出てきて、世間は大変なことになっているのではないかと自分の嘘に騙される。そんな遊びをしていたと書いてありました。多分、これもある種の救いのあり方なのではないかと思います。彼も生きづらさを笑いに変えてきた人だと思いますから。

B：子どもの頃ってこんなことをして遊びますよね。「これは別なものってことにしよう」ってルールを決めて、お互いそのルールの中で楽しむといったような。子どもながらの純粹さ、それがある主人公の世界と、それを排除する丸善に象徴されるような洗練された世界という対比があるのかもしれない。子供と大人と言ったような対比です。

E：子供というと、好きなものの中に、南京玉とか書かれていますよね。

【問いに迫る議論】

E：「不安から始まってユーモアにたどり着く、その媒介点としての檸檬の意味とは」とかどうでしょうか。「不安からユーモアへの転換を可能にした檸檬の意味とは」とか。

D：ある種の二重構造が見えてきますよね。主人公にとっては、檸檬が、自分の中の怒りとか熱を逃すための媒介物です。そして、小説とはそもそもそういうものですよ。この現実世界の不安とかから、一瞬忘れさせてくれるものが、小説とか、活劇とかでしょう。そういう入れ子構造になっていると思います。「『檸檬』という小説」は、あなたにとって「檸檬」なんですよ。そんな話でもあると思いました。

E：不安な主人公が檸檬を通して救われた、それを読んだ私たちが救われたというようなことですね。

A：「不安からユーモアへの転換を可能にした檸檬の意味とは何か」「なぜ檸檬が転換を可能にしたのか」でしょうか。「なぜ檸檬が可能にしたのか」という問いだと、「近代と身体を媒介するものとして檸檬があった」という議論になります。先程の議論に出てきた二項対立が生きてくるように思います。

B：二項対立が重なっていることをなんと言いますか。マトリクス構造で良いでしょうか。日本的と西欧近代、身体性と幻想というマトリクス構造があります。そして、その下には不安があります。存在不安みたいなのです。その存在不安の上に乗っかっているマトリクス構造を、全体として破壊するのが、ユーモアなんだと思いました。そもそも、その構造自体を無くす、破壊するものとして檸檬があったのではないのでしょうか。

D：ユーモアはある種の破壊ですよ。

E：問いの立て方自体を壊しているということですね。

B：ルールを変えることによる笑いですよ。そうやって考えると、檸檬はマトリクス構造のど真ん中にくるはずですよ。

E：不安をなくすためには、不安と同じレベルの問いや答えではだめです。その不安の前提を壊さないとダメだから、それが檸檬だったということです。

B：それを一言でまとめられないでしょうか。

A：そんな続きの議論を次回できたらいいと思います

F：「なぜみかんじゃなくて、りんごじゃなくて、檸檬なのか。」はどうですか。

E：芥川は蜜柑を書いていますよね。汽車の中の話。救われる話。芥川にとっては蜜柑だった。

D：現代に引きつけるのも面白いですよ。読書会の趣旨と合っているのかわからないけれど、『檸檬』の百年後の今、現代もこの問いはあまり変わっていません。当時「日本的なもの」対「西洋外来的なもの」だったとしたら、現代は「グローバリズム」対「ローカルなもの」という対立に変わっていると思います。私は現代の行き詰まりはそこにあると思っています。ならば、現代の檸檬は何かと問うのはどうでしょう。

B：「コロナウイルスです」と名乗ることも、破壊願望のメタファーになり得ます。自分は致命的なウイルスにかかっていて、密なところに行って「うつりました」「うつりました」と言うことだってあり得ると思います。破壊願望を満たすものになり得ます。

F：そういう妄想をしている人はいそうですね。

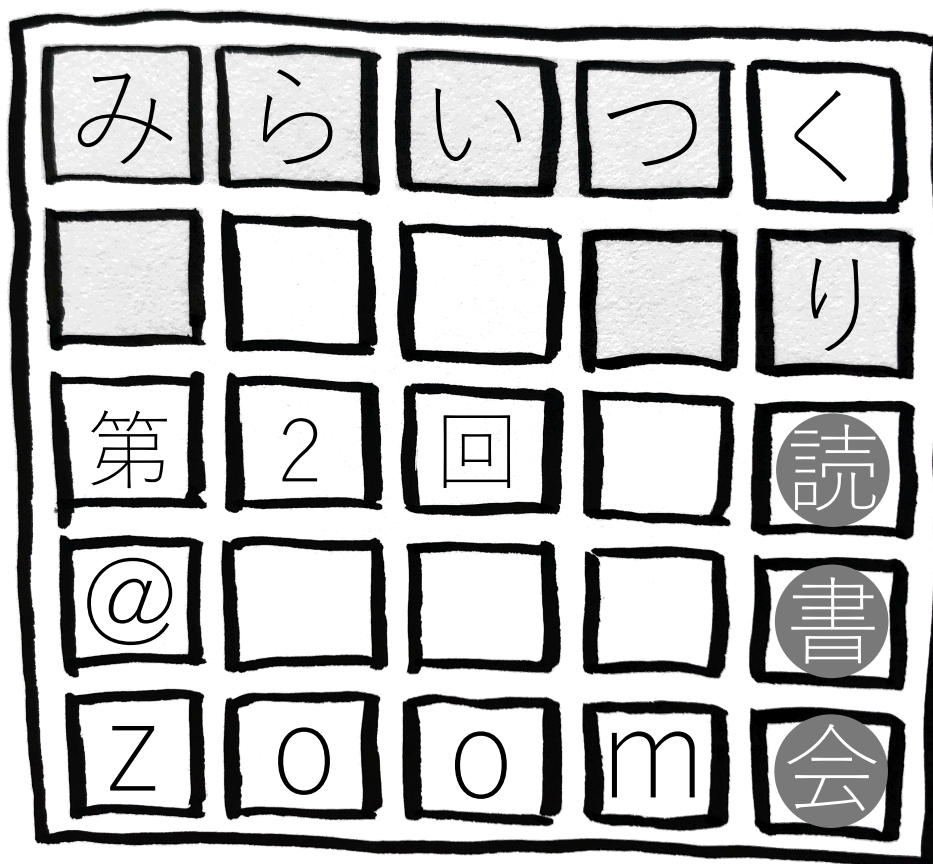
B：実際に感染していてやった人もいたはずですよ。赤木智弘が書いた「『丸山真男』をひっぱたきたい」という論文がありますよね。戦前の知的な階層の人たちを丸山真男に重ねて、フリーターである自分の状況を根底から覆すような戦争が起これば、二項対立そのものがなくなる、という論文。今の状況をそう捉えている人もいるかもしれませんね。その人の暮らしぶりによっては。

E：二項対立ですが、「みすばらしくて美しい」とあるので、二項対立と一緒に、矛盾も描かれていますよね。二項対立だけではないのかもしれませんが。

【再読のための問い】

「日本←→西欧近代、身体←→幻想というマトリクス構造とその前提にある不安、それら全てを破壊するユーモアとして、なぜ檸檬が用いられているのだろうか。」

以上



【日時】

- ①2020年5月29日(金)10:00~11:00
- ②2020年6月5日(金)10:00~11:00

【課題図書】

芥川龍之介『蜘蛛の糸』
(「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房)
1986(昭和61)年10月28日第1刷発行
青空文庫→<https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/card92.html>

【参加方法】

興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所 松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

みらいつくり大学校企画



第5回みらいつくり読書会@zoom 記録

以下の議論の続きを「第2回みらいつくり読書会@zoom②」として行います。

2020/6/5 10:00~11:00 に行いますので、参加希望の方は事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
芥川龍之介『蜘蛛の糸』	2020/5/29 10:00~11:00	A,B,C,D,E

内容（※語尾を中心に編集しています）

【それぞれの感想】

A：昔に絵本でも読んだことがあるような気がしています。蜘蛛の糸と聞いて思い出すのは、悪い人がいてお釈迦様が蜘蛛の糸をたらず、そして下の人に悪いことをして、自分も落ちてしまう。「悪いことをしたらダメなんだよ」という話だと思っていました。改めて読んでみると、極楽の描写が美しく描かれていると思いました。色や香りを豊かに書いていると感じたので、絵本にするのはもったいないと思っています。考えながら読んで想像しながら読むと楽しい本だからです。気になった箇所は、最後の「蓮はそんなことに頓着致しません」というところです。まるで蓮池の蓮は人のように描かれています。最後の部分はなくても物語は完結するような気がするけどしっかりと一段落を使って書いてあります。もう一つは最初の場面、お釈迦様が「ふと」と書いてある。お釈迦様って気分屋だと思いました。偶然見かけたから、救われるチャンスがあったということですね。これがお釈迦様の宗教観なのだろうかと思いました。私の知っているキリスト教ではこういう風には書かれ得ないと思いました。

B：短くて読みやすかったです。昔読んだ時の印象と違っていたのは、蜘蛛の糸を登っている最中に、下から来る人を蹴っているような気がしていたんですね。下から来た人たちを蹴った時にプツッと糸が切れると思っていたけれど、そうではなかったです。発言したことによって切れたということです。ここに、人間らしさが書いてあるのかもしれないと思いました。ぷつと切れるのが人間を描いているんだなと思ったということです。極楽については、仏教でよく言われるので、極楽の記述についてはすんなり入ってきました。実際うちは仏教です。お釈迦様ではないけど、仏様と言う。こういう話をしていることが多いです。私の中にある、すーっと来て、ふっと見て、こうですね、ああですね、と諭して、我は関せずにもた消えていくというようなお釈迦様への印象は、本のままだと思いました。

C：僕はカラゾフの兄弟に出てくるネギの話の思い出しました。一本のネギを困っている人にあげた、そうすると、死後に地獄に落ちるけれども、一本のネギが天国から垂らされて、それにしがみつくと天国に行ける、という話です。全く同じ話ですね。どちらが先なのか興味があって、一度調べたことがあったんです。でも、どちらが影響を受けたということではなかった、という結論だったような気がします。それにしても似過ぎている。普遍的な話なんだなと思いました。ですが仮説としては、共通のインスパイア元があるということは考えられます。どちらが参照したではなく、それぞれが同じものを読んで思いついたということです。そう考えると、新約聖書のラザロの話があります。貧乏人のラザロと金持ちの話です。二人ともが死んで、金持ちは地獄にいて、貧乏人のラザロはアブラハムの懐にいます。そこから、これらの話を着想

することはあり得るよなと思います。仏教的に語るのと、キリスト教的に語るの違いはあって、ドストエフスキーはギリシャ聖教ですがキリスト教だと言えます。Bさんが言っていたように、仏教のいう神観というのは、そもそも神はいないということです。唯物論ですよ。そして、残酷と言えば残酷で、最後のあっさりしたラストもそうだけど、この世を、天国を含めて、突き放すような、それらをもはや超越している世界観ですよ。私たちが喜怒哀楽したりカタルシスみたいなものを感じたりすることを、全て否定したのが釈迦だと僕は思っています。四苦八苦から解脱するんだということなので、私たちが感傷に浸る余韻すらないという感覚はあるのではないかと思います。その辺の仏教の世界観は、高畑勲の『かぐや姫の物語』を観た時にも、同じことを思いました。あれを観た時にも「仏教って怖いな」と思ったんです。本当に厳しくて容赦ないですよ。慈悲って仏教の言葉だけど、無慈悲と言っても良いくらい救いようのない感じがあります。このお釈迦様の振る舞いからもそう感じました。

D：(画面共有をしながら) 1回目はさらっと読んで「短いな」と思いました。2回目に線を引きながら読んでみました。Aくんが音とか匂いとかいわゆる感覚的なことの表現が芥川が上手だなって話をしていただけで、自分はそういう読み方はしないんだと改めて感じてしまいました。なんて感覚的じゃない人間なんだと思いました。センター試験でやったような現代文の読み方ってありますよね。あれが染みついてしまっていて、どうしても構造的に読んでしまいました。あまり良くないと思うのですが。構造的に読んだ結果、最初に書いてある「池の中に咲いている蓮の花は～」と、全く同じことが最後に書いてあるんですよ。だけど、最初は「極楽はちょうど朝」とあります。そして、最後は「極楽はもう午に近く」とあります。この構造を見た時に「怖い」と思ったんですよ。さっきAくんが言っていたお釈迦様が気分屋だったという感覚は僕も同じように捉えています。ここに描かれていることはたった数時間のことなんですよ。なおかつお釈迦様がずーっと立って横で見ているという。かわいそうだ、と言っているけど、すぐにまた歩き始めるんですよ。もう一つ「うわー」と思ったのは、最初の方でお釈迦様が、犍陀多(カンダタ)を見た時に「思い出した」とあります。蜘蛛を殺さなかったことを思い出したということです。蜘蛛を助けたからではないですよ。下の方で動いている犍陀多を見て、そう言えばこいつ前に蜘蛛殺さなかったなと思って、救い出そうと思いついたということです。とっても怖いなと思いました。Bさんも言っていたけど、たまたま見てもらって、たまたま助けてやろうと思われた。だけど結果うまくはいかなくて、叫んだ瞬間にプツリと切れるというのは衝撃的です。これが仏教でいうところのお釈迦様を的確にあらわしているかどうかは別の話なんだと思います。キリスト教的な見方だと「常に見ている」ということがあります。誰もが常に見られているという感覚なので、見ていないから大丈夫、という感覚は無いと思います。でもこれは、たまたまお釈迦様を見たからこうなったというような感じだったので、その辺がゾッとする話だなと思って読みました。最後の「しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんなことには頓着致しません。」と先ほどAくんが人格化と引用していましたが、その次の「ゆらゆら萼(うてな)を動かして」とあります。萼がわからなかったのが調べたのですが、仏説で極楽往生したものが座る蓮の花の形をした台なんです。それを「ゆらゆら動かして」というのが、とっても気分的で、思いつきで、次はどいつにしようかな、というように感じました。犍陀多に糸を垂らしたけれど、「やっぱりね」というようにして糸が切れるというような、そんな感じがしました。

E：昔、教科書に載っていたと思います。そんなに読書が好きではなかったので多分読んだことあるというのはそういうことかと思えます。すごく怖かったのを覚えています。糸一本で人生が変わってしまうことが怖いなと思えました。「おはなしのくに」というテレビ番組でやっていました。

D：Eさんも、主人公が下から来た人を蹴るイメージでしたか？

E：どうだったか覚えていません。

D：Aくんが言っていたように、必ずしも絵をつけることが良くないかもしれないですね。子どもに伝えるときも気をつけないといけないですね。

【感想を重ねる】

A：それぞれの感想を聞いて、感想に対する感想はいかがですか？

B：宗教的な話にはなってしまいますが、仏教で怖いなと思うことがあるんです。私は日蓮宗なのですが、鬼子母神という神様がいます。昔、鬼が村の子どもをさらって食べていた、だけど、次は村の人たちが鬼の子どもをさらったんです。あまりにも鬼が村の子どもたちを食べるからです。そして、村人が鬼のたった一人の子どもをさらった時に、鬼が泣いて謝って、もうしませんとなって、神様になったということなんです。そこから子どもを守る神様になったということで、その日蓮宗の鬼子母神という、鬼の母の神様をまつようになったんです。鬼が村の子どもを食うというのも残酷だなと思うし、自分の子どもがさらわれた時に申しませんと言って神様になるというのも、身勝手だなと思います。

A：今の話も怖い話ですね。

C：仏教はいろいろありますし、日本に来てからすごく変わっているので、論ずるのが難しいですよ。主語が大きくなり過ぎてしまうので。小乗仏教、日本で変異する前の仏教で言えば、仏教は突き詰めると唯物論になるのではないかと考えています。量子論や最先端の物理学を研究する人たちが「世界は仏教だ」と言うことがあります。量子は確率の世界です。因果の世界ではありません。「因果ではなく確立が全てを決める」というのが、量子論の描き出す世界だと思います。その量子論と仏教が似ているという人たちがいるんですよ。仏教はそういうところがあって、物だけを透徹して考えると仏教になるということがあるような気がするんです。お釈迦様が偶然見たというのはとっても量子論的ですよ。ビリヤードの玉のようです。ゆらゆらというのが、右に行くか左に行くかわからないということからもわかると思います。そこには良いも悪いもなく、感情もなく、ただそれが起こったそれだけ、というのは仏教的だと思いました。芥川なりの仏教観なんだと思います。芥川は『西方の人』でキリスト教についても書いています。なので、芥川はキリスト教にもある程度精通した上で、これが仏教の世界なんだと小説で表現したかったのかなと思います。羅生門も、真実なんて無い、真実の捉え方があるんだ、という話です。真理があるという前提を疑うということです。キリスト教的世界観に対する東洋的なものの見方を描くのが芥川は上手だと思います。だからこの作品は彼なりの仏教観の表明なのかなと思いました。

A：芥川は、美について神秘性をもっていたというイメージがあります。芸術というものを信じていたのかと思います。

D：よく見ると、救い出してやろうと考えた後に、蜘蛛の糸を差し出すところで、「幸いそばを見ますと」とあります。何て言うんでしょう、お釈迦様が助けようと思って、周りを見渡すとたまたま「おっ」とこれだと思ったのか、あるいは穿った見方をすると「これを使うと面白いな」と思ったのか。どう考えても切れませんよね。お釈迦様ですら、それに意味があるかどうか有効かどうかもわからない、もし無効であると思ってやっているのだとしたら、さらに怖さが増しますよね。蜘蛛の糸でやってみてうまくいくのかどうか、糸が切れるかどうか、何人のつたら切れるかどうか、あるいは韃陀多がそういう無慈悲な言葉を言ったら切れたとか、それらを見ているのだとしたら。それもお釈迦様が切ったのでもないとしたら…「お前はやっぱりそんなこと言うのか」となって切ったならわかるけれど、「言った時に切れたな」とお釈迦様が発見していた

としたら、さらに偶然の話なのかもしれませんね。

C：先程の絵本の話じゃないですが、蜘蛛の糸を、教訓めいた話として、勸善懲悪的な話として解釈することがあると思うんですよね。でもこれは、教訓めいた道徳をちょっとも大事にしていらないと言うか、それを侮辱するような話ですよ。逆なんですよ、芥川は。僕はそう読みとっています。「良いことをしましょうね」を踏みにじると言うか、ちょっともうコケにしていると言うか、突き放していると言うか、「世界はそんなにエモーショナルな場所ではない」と、「ナイーブに勸善懲悪とか信じてんじゃねえよ」という感じがします。芥川は、これらによって、そんなことを皮肉っている、解体しようとしていると思います。

D：そうやって聞いていると、芥川をもっと読みたくなりますね。

A：最後に大正7年に書かれたとありますよね。調べると、スペイン風が流行り始めたころのようです。今とも重ねながら読むべきだとも思いました。カントの『実践理性批判』が邦訳された年でもあります。カントが日本に入ってきたころなのかと思うと、そんな世の中の雰囲気、今の話の中の道徳を皮肉る、勸善懲悪を皮肉るということを、子ども向けに書くてすごいなと思えました。

D：これって子ども向けなんですか？

A：児童書ですよ。『赤い鳥』に載っているはずですよ。

D：それは怖いんですね。先程の「そんなんじゃないよ」という風に書かれたと言われるとそう読めるような気がしてきました。

C：聖書の福音書の例え話も、僕らは道徳めいた話として捉えますよね。自分の道徳観をそこに読み込みがちですよ。最近、カトリックの神父が書いた本を読みました。聖書の中に、右の頬を叩かれたら左の頬を差し出す、という話があります。それを究極の博愛主義者のようにして僕たちは読んでいます。でも当時の文脈は逆だという話です。左手で何かをするというのはもうあり得ないことだったらしいです。つまり右手で叩いたことになる。右手で叩くと、普通は左頬に当たるはずですよ。だけど、右頬に当たっているということは、右手の甲で叩いているということになる。右手の甲で打つというのは、侮辱を表す行為だったようです。だからローマの法律で、主人が甲で奴隷を打ったとしても訴えられてしまうことがあったようです。つまりひどいことだったということです。つまり、左頬を出すということは「俺を人間として扱え」ということになる。つまり「あなたは私と同じくらいの、対等の土俵にいるんだ」という記号になります。左頬を差し出すのは「俺は人間だぜ」と言ってやれという意味だと書いてありました。もちろん諸説あるのだと思いますが、ここから僕が思ったのは、聖書の話って、当時の文脈でわからなくなっていることはあるけれど、僕たちが勝手に、道徳とか僕らがあらかじめ持った道徳、勸善懲悪観といったものに引っ張られているところがあると思います。この『蜘蛛の糸』はその典型だと思います。僕らは「良いことしましょうね」とこの本を読みます。でも芥川はそれを逆手にとって、こういうものを嘲笑する立場で書いているのではないのでしょうか。そういう芥川の意地悪さみたいなものを感じます。

A：犍陀多の無慈悲な心とあります。心が問題だと書いてあります。私も心が大事だと思いがちです。でも心だけではなく、行為も大切ですよ。そしてここには「心が」と書いてあるんだけど、もっと広い目で見ると、お釈迦様の気分次第だっている構造になっている、確かにそんな道徳を皮肉っているのではないかと思います。

D：お釈迦様の気分ですらないということですよ。蜘蛛の糸を垂らしたのはお釈迦様の気分だったけれど、それがどこで切れるかということにお釈迦様の観念が介入したようには見えません。お釈迦様は「悲しそうな御顔」とあります。救おうとしたけれど、やっぱりダメだと思って自分で切ったということではなく、見

ていたけれど切れちゃって「そういうことか」と思って、またぶらぶらと歩きます。僕にはまた違うターゲットを見つけて歩き出しているように読めました。

C：僕は、高畑勲の『かぐや姫の物語』をみた時に「ホラー映画だ」と思ったんです。とっても怖いんです。月に連れて行くんですが、その使いたちの顔がめちゃくちゃ怖いんです。全ての私たちの悲喜交交を嘲笑うかのようにしている。超越しちゃっている。まさにこのお釈迦様のようなんです。仏教ってこういう厳しさが本来あるんだよな、と思ったんです。それが親鸞になるとキリスト教に近付いてきますよね。親鸞の前の仏教って、本当にこういう徹底した無情感があります。もう一つ思い出したのは、松本人志の『シンボル』という映画です。あれは松本人志の神観の話だと思っています。ある日、白い部屋にパジャマのまま自分がある。そして壁にある何かわからないものを押すと、壁から何かが出てくる。あるときはお寿司が出てくる。次は醤油かなと思ったらソースが出てくる。ずーっと続くのですが、一つ言えるのは、何をしたら何か出てくるという法則が何も無いんです。それで彼は気が狂いそうになるんだけど、最後ラスト 5 分で話が変わります。白い部屋は超越空間を表しています。つまり白い部屋はこの世界とは違う場所なのですが、彼が押したスイッチが、この現実世界で何かを起こしているということが明らかにされていきます。彼がスイッチを押したことで、現実世界では、あるレスラーの骨折した首が治ったりする。でも押したスイッチによって、スターリンが現れたりもする。冷戦の終結にもなる。現代史を変えていくということになる。最後の最後、ラストシーンで、超越空間のさらに超越空間に行きます。そこに巨大なスイッチがある。巨大なシンボルがある。それを押すぞという所でエンドロールになります。何かというと、神はこういうものだという松本人志なりの世界への宣言だと思います。「この世界は統一された神が支配している」と西洋の人なら思いたいのですがそうじゃ無い、パジャマを着たおっさんがシンボルを押している結果が、世界に起きているんだということです。世界は偶然の連鎖であると。それはとっても仏教的ですよ。

D：もう少し芥川のそういう感じを扱いたいですね。同じくらいの長さはないでしょうか。

C：『藪の中』は黒澤が『羅生門』というタイトルで映画化していますよね。小説は『藪の中』ですよ。黒澤は二つを合わせたんでしたっけ？ 真実がわからないというのは『藪の中』ですね。

D：『羅生門』は若干長いですよ。『蜘蛛の糸』に比べると。『蜘蛛の糸』とセットで『杜子春』がありますよね。これはそんなに長くなさそうですね。同じテーマでしょうか。

A：やはり『杜子春』も児童向けのようですね。

D：そうなんだ。

B：えー。

C：本当だ。

D：次は『杜子春』にしましょうか。

A：仏教を皮肉るということなのでしょう。

C：仏教の定義にもよりますよね。大乘仏教以降は道徳性も社会規範も出てきますよね。でも釈迦はそれらを否定しています。世界を突き放す生き方をしたと認識しています。芥川は本来の仏教はこういうものだと言いたかったのかもしれないですよ。日本のセンチメンタルな仏教を皮肉りたかったのかもしれないと思います。

D：禅宗はさらに唯物論的だと思います。でもこの物語は禅宗的ではないですよ。やはり児童向けの芥川を読んでみたいですね。

A：仏教とすると言葉が広いので、仏教ではなく、徹底した法則の無さや無情を、杜子春でどうやって書こ

うとしているのかを読みましょうか。

D:『蜘蛛の糸』でこんなに広がるとは思いませんでした。

C:芥川は面白いですね。「お前らどうせこう思っているだろうけど、自分は違う角度から書いているんだぜ」っていうか、思い込んでいる人たちを嘲笑うっていう感じがあります。『藪の中』もそうですね。人の思い込みを嘲笑う趣味がある気がします。

A:高校の時の現代国語の授業で、芥川の凄さを語っている先生がいました。芥川は「弟子にしてください」と文系の頭のいい若者が来た時に「君は数学ができるか」と尋ねたと言っていました。そして追っ払ったと。数学ができないと小説は書けないと。私は「数学がんばりなさい」と国語の時間に教わりました。

D:それは構造的に作っているということですよね。

A:そうだと思います。

D:芥川はキリスト教的な作品も書いているんですね。

C:僕が知っているのは『西方の人』ですね。

D:『煙草と悪魔』というのも、キリスト教関係のようですね。他にもありそうです。「芥川とキリスト教」という論文を書いている人もいますね。そっちの観点で見ても面白いですね。

A:仏教を皮肉っているとしたら、キリスト教を皮肉っている可能性はありますよね。

D:『杜子春』にしますか、それともキリスト教関係にしますか？

A:今Wikipediaを見ると、『蜘蛛の糸』と同じように『赤い鳥』に載っている『犬と笛』は神道っぽい話ですね。

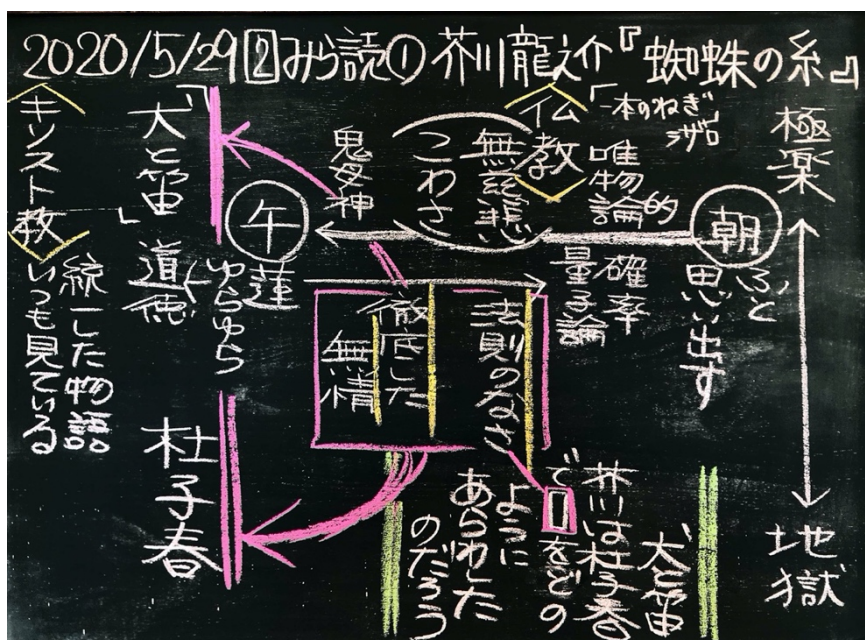
D:確かにそうですね。同じ児童書で『犬と笛』にしますか。そしてまだ芥川熱が覚めていなかったら、キリスト教関係に行ったらいいかもしれないですね。

A:次回は6月5日(金)同じ時間をお願いします。

【再読のための問い】

「芥川は『犬と笛』で、『蜘蛛の糸』に書かれているような無慈悲や法則の無さ、徹底した無情をどのよう

以上



第6回みらいづくり読書会@zoom 記録

以下の議論の続きを「第2回みらいづくり読書会@zoom③」として行います。

2020/6/26 10:00~11:00 に行いますので、参加希望の方は事務局までご連絡ください。

事務局 みらいづくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
芥川龍之介『犬と笛』	2020/6/12 10:00~11:00	A,B,C,D,E

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：髪長彦って変わった名前だな～と思いました。どれだけ美しいのかな、女のようにと書いてあったからどんな人だったのかなと思いました。

B：芥川続きでしたが、今回の作品は綺麗だなと思いました。人間のドロドロした部分もそんなに書かれていないし、すごくわかりやすいし想像しやすい、児童書っていうだけあって面白いなと思いました。あと、いろんな今につながる話、映画なんかでもこういう話が元になっているのかなと思うくらい、ありきたりのように思いました。善良な市民がいいことをして褒美をもらって、なおかつ冒険もありといったような話だなと思いました。特に引っかけるところはなく読みました。今までの芥川らしさが無いような気がしました。芥川と言われなければ気が付かないかもしれないと思いました。するすると入ってきて面白かったけれども特に印象に残ったところや心に残ったところはありませんでした。

C：似たような感想は持ちました。芥川の作品をいくつか読みました。『羅生門』の映画を観ても、『藪の中』を読んでも、やはり芥川は勧善懲悪を皮肉るような作品を描いていると思いました。「君たち、犯人を探しているんでしょ」「そんなのわからないんだ」「真実なんて無いんだ」と2020年に作品を読んでいる私をも笑っているような感覚がありました。そして『犬と笛』を読みました。私の読んでいた芥川では無いとも思いました。でもこんな作品にも裏があるのではないかと読みました。これにも裏があるのかと読みつつ見当たらない。それでも探してしまう、ということを芥川に笑われているような気持ちになりました。もう芥川に騙され続けているような感覚になって、自分がすっかり芥川にはまっているんだなと思いました。芥川の作品はたくさんあるけれど、私は今回一つの作品が他の作品の読み方にも影響を与えることを経験しました。『杜子春』も最後はいい話だな、と終わります。それがとても怖く感じました。

D：善良な市民が褒美をもらうという話ではないと思いました。児童書の体を成しているから、子どもが読めばそうなるのかもしれないけれど、ここでいわゆる芥川的な悪巧みのようなことを探して考えて読みました。髪長彦は善良な市民ではないと思いました。見た目が美しいことと笛がうまいということだけしか書かれていません。突然あらわれた大男が好きなものを望めと言う。そして犬を望んで、結局二人のお姫様を助ける。結局自分の手柄を自慢したいという思いが起こってきたというのは『蜘蛛の糸』と同じように「自慢したい」「自分の方が優位なんだ」ということが描かれていると思いました。だから善良な市民ではない。結果的に手柄を取られたけれど取り戻します。そこに勧善懲悪的な

圧倒的に良いものと圧倒的な悪のものという作品ではない。一番「なんで?」と思ったのは、一番最後の「どちらのお姫様と結婚したのかはわからない」という部分です。その理由も「それだけは昔のことだからわからない」とあります。他のことも同じように昔のことだし、なんなんだろうと思って、その辺に探りを入れてしまいました。

C: 私も疑って読んでしまっています。皆さんの話を聞いていて、Aさんが言っていたような「髪長彦」から受ける印象が、当時読んでいた人たちのものと現代の私たちが受けるものと同じかはわかりませんが、まるで「善良な」と読んでしまうんだなとも思いました、主人公は、髪長彦は、いいやつだったと読んでしまうということです。

B: そうですね。褒美を取らせるという時に、別にお金や刀ではないことで、心が綺麗な人なんだなと思ったんですね。

C: 最初の部分で、女のようにやさしくってとあります。これは全然内面のことは言っていません。女のように「美しくて」ではなく、「優しくて」と書いてあるところに、まるで心が優しいかのように、いい人かのように誘導している部分があるのではないかと思いました。でも描いてあることは、ただ笛が上手だったということです。

D: そうです。笛と見た目だけです。

C: 後は強欲ですね。

D: 犬たちが凶暴ですね。土蜘蛛がどれだけ悪いことをしたのかははっきりわかりませんが、若干かわいそうでもあります。お姫様は「とりこになっている」ともあります。お姫様が虜になっている。

C: ただお姫様が土蜘蛛を好きになったんだとしたら、とても怖い話になりますね。

D: でもしくしくは泣いています。虜になるのが、捕虜になるという意味なのかもしれませんね。土蜘蛛は途方もない悪者とも書いてありましたね。でも、頭を噛みちぎられてしまいますからね。

B: 確かにこれはちょっとびっくりですね。

D: ぜひ実写化してほしいです。『羅生門』のテイストで。正面のカットで犬が出てくる。

C: 近代的な『キングダム』のような実写ではないですか？

D: そうではなくて、昔ながらがいいですね。噛まれたままの首のアップがうつされるような。姉妹もそうです。どうなっちゃっているのという感じがします。お父さんはどうしているのでしょうか。探しに行かないのでしょうか。侍から聞いただけです。そしてたまたま犬がいるからできるような気がした、そして助けて、帰りに侍がいたから自慢したくなった。とても善良な市民の話ではないと思います。

B: ちょっと表現を間違えましたね。(笑)

C: 与えられた犬については、笛の音が好きだったからということです。『蜘蛛の糸』ならお釈迦様が気まぐれに与えていますが、この作品では、笛の音が好きで、髪長彦が犬を望んだから与えられたというようなことです。与える側の気分が移ろいやすい感じは『犬と笛』にも表現されていると思いますか。

D: あると思います。髪長彦はただ笛を吹いていただけです。犬でいいのかという感じで不思議な犬をくれる。十分気まぐれだと思います。次に出てくる神様も、そういう感じ。また出てくる三人の神様は障害者です。手がなかったり目がなかったりします。二人目以降が与える理由は笛なんて関係ない。兄がやったから俺も、といった感じです。そして髪長彦はさらに良いものをくれと言う。そして渡

す。大男も兄よりも良いものをあげたいと言う。髪長彦も「もっともっと」となっていく。挙げ句の果てに姫様をゲットした後、元々は自分より位が高かった侍に自慢をする。読みすぎかもしれないけれど、いわゆる資本主義的な「もっと良いものを」といったようなことを表現しているのかもしれないね。

C：犬の与え方について、俺もお礼をしたいということにすり替わっています。最初に出てきた神様に感謝の気持ちがあるのかわからないけれど、二人目以降はそんなこと微塵もなくなる。やはり『蜘蛛の糸』のお釈迦様のような怖さがありますよね。「与える」ということに関して、普通は心が伴っているように考えるけれど、全然違う。巨大な力を得て、どんな反応をするのかを確かめるような意図を感じます。

D：犬を連れて侍に会った時、丁寧にお辞儀をしてとあります。侍は三匹の犬を馬鹿にしながら去っていく。道具を持つこと、持ち物が人間を変えてしまうということかもしれません。もともと髪長彦は笛を吹いて木を切っているだけのはずですよ。

C：じゃあここにある幸せってなんだったのかということもありますね。

D：二人の侍も木こりにまんまとやられたから許せない、と言う感じになっています。それでも犬で取り戻しますよね。やっぱり犬です。

C：この当時、いいことをしたら良いことが起こると言うような道德観が普通だったということですよ。

D：立て付けはそうですが、芥川が伝えようとしたことは違いますよね。児童文学としてはそうですが、大人が見るものとしては違います。

C：この前提がないと皮肉る相手がいなくなってしまうからね。

D：犬を与える大男の側にも欲望があるのだと思います。勾玉の色の違いには意味があるのでしょうか。足のない男、手のない男、目のない男です。

E：神話的ではありますよね。僕はかぐや姫に似ていると思いました。かぐや姫の殿様のところにたくさんの方が来ますよね。

D：かぐや姫ではその部分が長く描かれています。

C：かぐや姫では、そんな宝は存在しないものを探すように言います。

E：そうですね。無理な問題をかけるんです。

B：アラジンと魔法のランプも近いのかなと思いました。アラジンのランプを手に入れたからコソ泥だった男がお姫様と結婚する。何かを手に入れて望みを叶えるという物語です。

D：ディズニーで味付けをするとそうなりますが、芥川で味付けをするとそうはなりませんよね。

C：ディズニーでは、場面と場面の合間で、建物の屋上から街を見渡しながら感傷に浸るというようなシーンが描かれます。実は自分の心はきれいなんだというような場面が出てきます。芥川的に書くなら、アラジンも髪長彦と変わらないと思います。

D：そうなんですよね。アラジンも報いられる理由なんでないはずですからね。たまたまラッキー、宝くじに当たったということですからね。

C：同じように苦しんで泥棒をしている人たちも同時代にたくさんいたはずですよ。

D：その前に泥棒じゃなくていいやつもたくさんいたはずですよ。絶対いましたよね。

D：どうして与える側の大男が不具なんでしょう。

E: 何の象徴なのでしょうね。犬笛というのが、これも芥川がどれだけ認識しているかわからないけれど、「犬笛政治」という言葉がありますよね。これは新しい言葉でしょうか。トランプは、あからさまに人種差別的なことを言うと批判をもろに受けるから、支持者にだけわかる形で伝えます。安倍首相が支持者にはわかるような形で日本会議のような内容を言います。それを露骨に言うと全新聞から怒られてしまいます。それらを犬にしか聞こえない笛のようにして伝えるということです。犬と笛というタイトルから一番にそれを思い出しました。芥川は『蜘蛛の糸』もそうですが、ある種の犬笛使いであるような気がします。「多くの人には道徳的な話と思われるけれど、お前はわかっているよな」といったようなことです。犬笛的なメッセージを込める人なんだと思います。だからこんなモチーフを選んだのかなと思いました。

D: なんで犬なのでしょう。桃太郎なら犬と猿とキジです。でもここでは全部犬ですよ。何かの奴隷になっていることを犬と表現しますよね。政府の犬とか資本主義の犬とか。そういういろんなものに支配されているものたちを登場させているのでしょうか。髪長彦も、お姫様もそうですよね。虜になっていますから。

E: システムに従順なんですよ。みんな。

D: それらをひっくり返す要素は、いずれも「所有物」です。道具というか。髪長彦の元々の人格ではありません。髪長彦は笛がうまいという所有物によって犬をもらい、そのもらった犬という所有物によって、姫を助けて、欲が出たから自慢したいと思う。だから所有していたものを取られてしまうけれど、最後の最後その所有物を取り返す時に出てくるのも、お姫様がつけていた髪飾りです。そう考えると、資本主義へのアンチテーゼのように感じます。特になんでもないはず。大臣のところに行った時に、髪長彦と侍が見分けられる方法は、髪飾りだけなんですよ。正しさは髪飾りがあるかどうかだけで判断されます。全ては何を所有しているのかなんだ、ということかもしれません。

B: 腑に落ちました。

D: 違うでしょうか。

B: そうだと思います。何を持っているかによって人生は変わるということですよ。

E: それを批評しているんですよ。風刺しているということですね。

D: 最後に、言い方は悪いですが、お姫様と結婚してお姫様を所有します。でも姉妹どちらかわからない。そうやって言う必要あるでしょうか。「髪長彦は妹と結婚し」と言われたら、違和感はあるのかもしれない。そもそもそんなこと昔の話だから忘れちゃいました、となります。

C: 最後の部分気になりますよね。

D: 他の部分はとても詳しく覚えていますからね。どちらのお嬢さんになったかはわかるはずなのに。

E: 相当難しい作品だとは思いました。LSD 音楽じゃないけれど、相当なトランス状態で書いたような作品だと思いました。象徴性というか本人も何を書かされているかわからないというような感じがしました。『蜘蛛の糸』はまだ緻密に設計されているからわかるんだけど、『犬と笛』は難しい作品だと思いました。この作品にも、いくつかの引用元はあるはずで、かぐや姫もそうですし、ソロモンのエピソードとも重なります。夢という感じもします。「民話とか神話は共同体がみる夢だ」と河合隼雄が言っています。昔話が民話になるにつれて教訓性を帯びてくると話しています。最も古い話には教訓性がないと言われていました。古事記とかは教訓ではなく、よくわからない話です。ギリシャ神話もそうですが、よくわからなくて、そこから何を学べば良いかわからないというような話です。解釈から

放り出されるような感覚です。でも繰り返し語られることを通して、人間がそこに教訓を練り込んでいく、そして話が歪んで説教じみたものになっていくということです。それでいうと、『犬と笛』はそのままの夢の話という感じがします。だから解釈が難しいのではないかと思いました。

D：お姫様を取り返しにいくくだりも、もういないはずのお姫様の声が空から聞こえてくるんですね。もう一度読み返すと、途中から姉妹の声の一つになるとあります。そこからお釈迦様ではないけれど、話し出す。そして風が行き来する。そして金の鎧などを与えます。そして神様のような髪長彦になる。これも見た目が良くて笛が上手だったという普通の木こりが、物凄い所有物をまとめて登場した時に、そこにステータスを見出す周りの人々が描かれています。でも中身は変わっていません。最後にさらにステータスを得るということです。なんでこんなふうになっているのでしょうか。

C：この時点で天から鎧を受け取る必要はないですね。なかったはずですよ。むしろ、姫を助けたかどうかはわかれば良いだけなのに、たくさんものを身にまとっています。大臣のところに行く前から神様みたいになっている。

D：全部ものによって、その人が良いか悪いかが決まっています。

E：トロフィーワイフという言葉がありますよね。最近知ったのですが、トロフィーは、スポーツハンティングをした人が壁に飾る剥製のことを指すらしいです。あちらがおそらく先ということです。自分の収穫物を誇るということです。毎回獣ではないし、スポーツも変わるから、何か象徴をということで今の形になったということです。トロフィーワイフは、名を成して功を遂げた人が、すごいきれいな奥さんをもたらすことを言います。俺はこれほどきれいな奥さんを手に入れることができるくらい成功した男なんだと誇るんです。トランプはまさにトロフィーワイフを誇り続けています。

D：何度か変えながらですね。

E：そうですね。トランプの奥さんはトロフィーワイフを絵に書いたような人です。奥さんですらトロフィーなんだけれど、彼にとっては不動産の成功とか、トランプタワーが自分なんだと思います。でも実は彼はビジネスで本当に成功しているかというところではありません。彼は三回倒産しています。破産申請によってアメリカでは守られるから、結局は国の財政で守られた人です。だからビジネスで勝っているとは言えません。とにかく主観的には勝っている、富を得ている。彼は、生馬の目を抜くというような、人を出し抜いてでも富を得るというトロフィーに囲まれています。でもその中にあるのは空疎な人間だと思います。そんな人間と髪長彦の人を陥れてでも何かを得たいというところは似ているような気がします。芥川もそうですが、小説家は時代の100年くらい先のことを言葉にしてしまうことがあります。だから資本主義が行き着くところに来るのを予見していたのかもしれない。そんなことを考えました。

C：だから妹か姉かは大切じゃないのかもしれないですね。

D：大臣の娘であればどちらでもいいということですね。風によってくる声も、最初どちらかの声が聞こえていたけれど、一つの声になります。それも、大臣の娘というステータスの声というだけなのかもしれない。ものとして価値があるなら何でも良かったということですね。

E：記号としての女性ですね。トロフィーとしての女性です。かぐや姫の元に来る男たちもトロフィーとしての女性を欲しがっています。そういうものへの批判があるのかもしれないですね。

D：何で神だけ、キリスト教的な神ではありませんが、障害をもつ者として表しているんでしょうね。

C：強い力を持っているのは犬だけれど、誰にでも従属してしまう。神についても完璧な存在としては

描かなかったということではないでしょうか。

E：犬が iPhone、神は孫正義としたら、人は iPhone を持つことによって強くなります。ピストルを持つと心が強くなるような映画があります。その人自身は変わっていないのにたまたま持ったもので強くなるということです。

B：乗っている車もそうですね。小さい車と大きい車で乗り方が変わる人っていますよね。

D：ものによって変わるということですよね。

E：神の描き方で言えば『蜘蛛の糸』と通じるところがあると思っています。『蜘蛛の糸』でも気まぐれで救ったり救わなかったりしています。人間からした時に、神がどう感じられるかの方が芥川は興味があるのではないかとと思っています。多分、この世の中は不条理だから、気まぐれな神、足が一本無かったり手がなかったり目がなかったりする神っていうような、神は不具者ではないかと思うほどに一貫していないと感じられるということを表しているのではないかと思いました。神は不具であるという批判ではないかと思いました。

B：不具はどんな意味ですか？

E：障害者ということです。

D：今は使わない表現ですよね。

E：不適切な表現ですよね。旧約聖書には、神が人間に対して「わたしが不具だというのか」と語る場面があります。旧約聖書では「いやそうでない」と続きます。芥川も聖書を読んでいるので、彼は「神は不具だ」と言い立てているような気がします。神が本当に五体満足で完全なら、こんなに不条理はあるはずがないということかと思います。

D：マルクスも、資本論の中で物神崇拜ということを書いています。元々はただのものだったはずの商品が、交換価値をもつことによって、市場によって交換価値が広がっていった結果、あたかも神のような価値物であると捉えられてしまう。その究極が貨幣であるとしています。それに対するものが、使用価値であると。自分にとっては価値があることです。Bさんの娘さんが描いた絵は、Bさんにとってはとても価値あるものだけど、私にしてくれると言われても、私にとってはいりません。多分、この物語においては、交換価値、商品的なものに価値があり、使用価値、個別のこの人だからいいというようなことは全然出てきません。最後のお姫様がどちらでもいいのは、記号としてだけあればいいので、彼女たちの良さみたいなことはどうでもよくなっているのかもしれないですね。もっと怖い話にするなら、「足一つの神が妹と結婚し、手が一つの神が姉と結婚しました」とするでしょうか。

E：それはとても怖いですね。

C：私としては、もう芥川にハマっちゃっています。もう最初のようにただの物語としては読めません。

D：どこまで芥川を読みましょかね。やはり、『西方の人』まで読むべきでしょうか。いわゆるイエスの話なんですか。

E：そうですね。イエスの話です。

D：キリスト教を風刺したり批評したりしているのでしょうか。

E：『西方の人』は、小説ではないんですよね。メモによると『西方の人』は、福音書を読んでそれをまとめたという感じ、とありますね。キリストをゲーテと比較していて、情熱的で短命であるというキリスト観をもっていると書いてあります。

D：何で『西方の人』と『続西方の人』を分けたんでしょうか。

E：何と『続西方の人』を書いた翌日に芥川は自殺しているようです。

B：えー。

D：じゃあ遺稿ということですね。

E：僕は、『続西方の人』の方が面白かったと書いていますね。

D：別な人も同じことを言っていました。

E：多分、芥川的に、この『続西方の人』でキリストに向かいあったのでしょう。そしたら自分が見えた。それで絶望したのかわかりませんが、鏡なんだと書いていますね。

C：これまでの作品で、芥川は常に嘲笑っていますよね。

E：そうですね。この人はスーパーニヒリストですよ。

C：信じている人を嘲笑っている立場ですよ。でもそれが変わっていかないと、自殺には至らないのではいかと思います。自分も愚かであることを自覚し始めるポイントがあるはずだと思います。

D：ニヒリズムの極地はそこにいたりしますよね。

C：『犬と笛』や『蜘蛛の糸』の時点では、そこにまでは至っていないような気がします。

D：突き詰めると、意味ないよと笑っている自分も意味なくなってしまうですよ。ニーチェと全く同じです。ニーチェは善とか全ての価値を皮肉って転換していきました。もしかすると芥川もそうになったのかもしれませんが。仏教的なもの、神道的なもの、キリスト教的なもの、全てをひっくり返して行ってニヒリズム的に突き詰めた結果なのかもしれません。やはり次は『西方の人』『続西方の人』ですね。

E：遺作でもありますからね。

D：この二つを読み、尚且つ芥川のニヒリズムについて考えるということですね。

E：芥川は本当に悪質です。よく言われるのは、児童文学って当時の少年少女にとって少年ジャンプを読むことです。当時の文筆家の人が書いた論文とかに、「最近の子どもたちは小説ばかりを読んで本当にダメだ」と、「ゲームばかりして！」という感じで書いてあります。実際そういうものでした。小説は文学と思われていませんでした。読むべきものは漢文であって、小説は娯楽のために書かれたものだから親は子どもに「小説ばかり読むな」と話していました。それは昭和初期くらいまで同じです。芥川はそんな文脈の中で少年少女たちにニヒリズムという毒を配っていた。毒入り饅頭を配っていたということです。

E：そういう人が最後にキリストに向かいあった時に、自殺を選ぶことが興味深いですよ。

B：芥川は遺書があるんでしょうか。

E：遺書があるかわかりませんが、「ぼんやりとした不安」は有名ですよ。

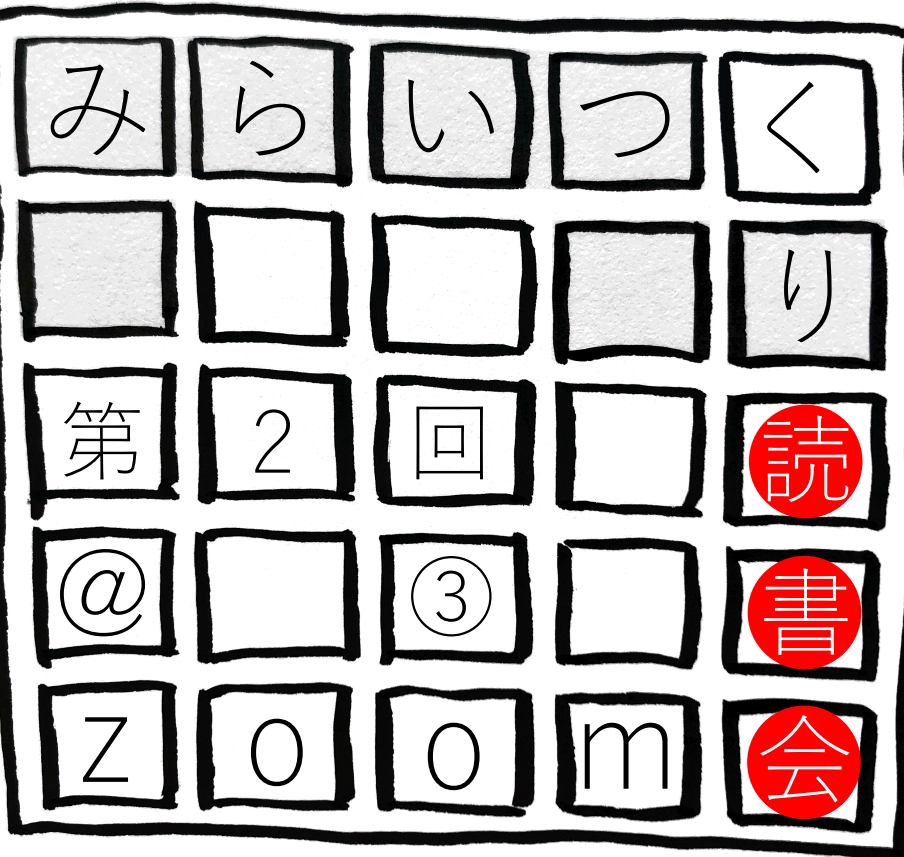
D：まさにハイデガーが追求していった生の根源にあるものが「ぼんやりとした不安」で、そこから逃げたいがために「人」として不安を見ないようにするという話です。いわゆる実存的不安ですよ。

C：個人的な話ですが、この世が不条理なんだとしたら、信仰ってどこにあるのだろうかと思最近考えています。最近、この世が勧善懲悪じゃないと成り立たない信仰って、本物じゃないと考えています。そんなことを芥川作品から問われているような感じがしていて面白いです。では次には『西方の人』『続西方の人』を読んでみましょう。

【次回作品のための問い】

「芥川は『西方の人』と『続西方の人』で徹底したニヒリズムをどのように表現したのだろうか。」

以上



【日時】

③2020年5月29日(金)10:00～11:00

※今回は前回の議論を引き継いで行います。

前回と前々回の議論は開催報告をご覧ください。

【課題図書】

芥川龍之介『西方の人』、『続西方の人』

「現代日本文学体系 43 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

※青空文庫で読むことができます。

【参加方法】

興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。

zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

みらいつくり大学校企画

第7回みらいつくり読書会@zoom 記録

これまで読書会は第〇回①・②と続けてきましたが、数えにくくなってきてしまいました。

次回以降は第8回～で統一して表記したいと思います。

第8回は、2020/7/10の10:00～11:00に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
芥川龍之介『西方の人』 『続西方の人』	2020/6/26 10:00～11:00	A,B,C,D

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：読んでいて幾つか面白いと思った部分がありました。聖書の中にある「山上の垂訓」を芥川は「詩」として書いてあるところがありました。『西方の人』の14ですね。感激に満ちた産物であるとしていました。幾つかのクリストが残した言葉を詩としてとらえていることが面白いと思いました。キーワードは、クリストが「詩人」であり「ジャーナリスト」であるということだと思いました。私は芥川自身が「詩人」であり「ジャーナリスト」であることを目指していたと読みました。芥川は自分のなりたい姿とクリストの生き方を重ねて、聖書を読んでいたんだらうと思いました。芥川は、この二冊の本でクリストのあり方を批判的に見ているというよりは、憧れをもって書いているのではないかと思いました。一方で、クリストが何度も現れるというような書き方をしていました。『西方の人』の34には、ゲエテをクリストとしています。「詩人」であり「ジャーナリスト」である人は全てクリストであるとして、芥川自分自身もそうであると言おうとしているのではないかと読みました。

B：この「クリスト」はイエス・キリストだけを指しているのでしょうか。そうではないと思います。「いわゆる」かと思います。「詩的」かつ「ジャーナリスト」である人たち、世を批判的に見る人たちを「クリスト」と呼んでいるのではないのでしょうか。

A：芥川は、イエス・キリストについて、特別な人であると思っていたけれど、現代のクリスチャンが思うような特別な存在としてイエス・キリストを見ていたわけではないという意味です。

B：だからイエスとは言わないですね。キリストはいわゆる「救い主」という意味があるように、抽象的な救い主として「クリスト」と書かれているのではないかと思いました。

A：私は全くそのようには読んでいませんでした。

B：芥川は相当独特な聖書の読み方をしているなと思いました。面白いですよ。共産主義の話やアメリカ聖書会社の話がありました。それらを皮肉ってました。「ジャーナリズム」とは何でしょうか。

A：私のイメージするジャーナリズムと芥川が使う「ジャーナリズム」は違うんだらうなと思ってインターネットで検索してみました。『西方の人』の中でいうと19ですね。社会を批判していくようなことを「詩人」とか「ジャーナリスト」と呼んだと思いました。

C：僕もそのように読みました。真実を指摘する、という意味でジャーナリストという言葉を使っていると思いました。

B:「ジャーナリスト」かつ「詩人」は合致しないように思います。「ジャーナリスト」は事実をそのまま書く人、詩人は全然違います。あえて「詩人」「ジャーナリスト」と相反するものを併せ持つ人として書いているのでしょうか。

A:ジャーナリストのところで、後に出てきた牧師たちが抽象的な言葉ばかり使っていてクリストのジャーナリズムを受け継いでいないと書いています。つまり、抽象的ではなく、具体的に書いて批判していくという意味で「ジャーナリズム」「ジャーナリスト」と使っていると思いました。

C:芥川は一貫してクリストは「ジャーナリスト」であると言っています。これが芥川のクリスト観です。「ジャーナリスト」という言葉の意味が江川紹子とは違って、多分一番近い言葉としては「預言者」があると思っています。旧約聖書に出てくる預言者はジャーナリストのようです。世の中の真実を言うという意味です。「預言者」という言葉からは、神の霊が憑依して勝手に口が動くというイメージがあるけれど、それは間違いで、旧約聖書に出てくる預言者のほとんどは今の言葉でいうと「ジャーナリスト」に近いのではないかと思います。池上彰がしているように、皆さんはこう思っているけれど、実像は違うんですよと言う。エレミヤが「あなた方は同盟を結ぼうとしているけれど本当は歴史を見ると捕囚になることはすでに書かれているとおりのことが起きているんだ」と淡々と語るわけです。そう言う意味で芥川は「ジャーナリズム」という言葉を使っているんだと思いました。そう考えると腑に落ちると思いました。僕は「そうそう」と思って読みました。

B:「ジャーナリスト」はどちらかというとも僕も違和感はありませんでした。むしろ違和感があったのは「詩人」の方です。『続西方の人』21にもあるように、当時の人たちが文化的であるということ、詩的であることをどのように考えていたのでしょうか。

C:そうですね。山上の垂訓を詩的であるということとか、どういう意味で使っているのかはわかりません。でも福音書を読んだときに、言葉の美しさなどはよく指摘されることでもあるので、そこにはあまり違和感は感じませんでした。

B:ゲエテはあまり読んだことがないけれど、そんな感じなんですか？

C:僕は『ファウスト』をぱらっと読んだことがあるくらいです。『ファウスト』は戯曲なので読みにくいです。西洋のキリスト教徒がもつ、世界が三層になっているというイメージはここからきているはずで、天国があってこの世があって地獄があるというイメージです。そういう世界観はゲエテの影響が大きいと思います。

B:ダンテではなくてですか。

C:そうですね、ダンテの『神曲』でした。勘違いしていました。ゲエテは『ファウスト』がいてという話ですね。『神曲』も読みにくかったです。ギリシャの哲学者とかローマ帝国の皇帝などが出てきていて、西洋の歴史がわからないと何を言っているのかわからないものでした。

B:最近、ニーチェを読んでいます。『ツアラトゥストラはかく語りき』とか、あれもいわゆる西洋の形而上学の歴史を、聖書はもちろんだけれど、わかっていないと、この本をわかったことにはならないと思いました。

C:ツアラトゥストラはゾロアスターのことですよ。

B:そうですね。いわゆる善悪二元論的なことです。それを根本から否定しようとしているのがニーチェですよ。道徳とか、善悪とか、それらは人間が作り出したものだと。それらを超越して超人にならなければいけないということが書いてあります。でもハイデガー経由でニーチェを読むとるほどと

思うこともあります。ハイデガーは後期にニーチェを扱っています。『存在と時間』につぐ第二の著作はニーチェと言われています。ハイデガーによるニーチェがあって、中公クラシックスで一と二が出ていて、それらを読むと「なるほどこうやって西洋の形而上学を批判していったのか」と思うんですね。芥川はその辺の知識があったんでしょうか。

C：当時の知識人って本当にすごいですよね。今の知識人とはまたレベルが違うくらいエリートですよ。一高とかがあった頃ですね。だから知っていてもおかしくはない。

B：聖書はともかく、どのくらいのもが当時に訳されていたんでしょうか。「もうこれ読んでいたの」と思うものが出てきますよね。原語で読んでいたんでしょうか。『続西方の人』の9クリストの確信に「超人」と出てきますよね。今回、読んでいて思ったんですけど、ニーチェの著作のタイトルが連発されています。

C：なるほどね。

B：『人間的な、あまりにも人間的な』というのがありますよね。これもタイトルです。超人というのもニーチェの言葉です。これはもしかして、ニーチェ的に聖書を読んだということなのかもしれません。

C：オマージュ的なことをしている可能性はありますよね。前回も話したけれど、芥川はハードコアなニヒリストだから、ニーチェに接近するのはよくわかりますよね。『ファウスト』のメモを見てみると、ニーチェの「超人」ってゲーテが元ネタであるとあります。だからゲーテに端を発する思想はナチスに至るまであと一歩なんだと書いてあります。おそらく「神なき世界に救済はあるのか」ということなのでしょう。ゲーテの『ファウスト』には最後に「永遠に女性的なるもの」が出てきます。

B：永遠に女性ですか？

C：「永遠に女性的なるものの救済」で終わるんです。

B：どういう意味なんですか。

C：『ファウスト』はロマンスも入っています。ニーチェもそうだけど、権威主義や父性原理、家父長制に苦しんだ人たちですよ。牧師である父親に虐待をされていましてよね。ユングも牧師であるお父さんにいじめられていました。それで彼は結局東洋思想に行くことになります。ニーチェは、父性と神とキリスト教がアマルガムになったような、圧倒的な権威主義に対する反逆なんだと思います。

B：ニーチェはもともと文献学者でした。いわゆる古代ギリシャ哲学などについてです。処女作において解釈をしたら、当時の文献解釈学のメインストリームからは外れていたようです。でも才能は早く認められていて二十代前半で教授になっています。でもワーグナーとかに接近して、そこもまた失望をくりかえして、最後発狂します。やはり父性原理と権威主義、学会の権威みたいなものが結びついて、それに対するいわゆるルサンチマンをもとに思索していったんでしょうね。26 幼な児の如くも、ニーチェからの引用だと思います。

C：なるほどね。そう言われてみると、芥川はニーチェなんですね。芥川はニーチェをなぞろうとしたんでしょうかね。

B：ニヒリズムをニーチェも突き詰めました。その結果、超人になると言っています。ハイデガーもそれを受け継いでいて、後期にはいかにニヒリズムを超克するかということが形而上学において絶対必要だとあります。いわゆる人間中心主義の行き着くところ、究極に押し進めるとそれはニヒリズムになります。31にも「人間的な、余りに人間的な」とあります。これもニーチェの著作そのままですよ。

ね。

C：ヒップホップのようにサンプリングしているんですね。ニーチェを。

B：35 に出てくる「ルナン」はイエスの生涯について書いた人ですよね。フランスの聖書学者かなんかで、当時の神学には沿わないような書き方をしたはずですよ。異端的な扱いをされていたはずですよ。そんなものも芥川は読んでいたんだと思いました。しかし、パウロは肯定的に評価していますね。最後はエマオですからね。『西方の人』は東方の人で終わっています。これもニーチェですよね。老子や孔子もできます。『続西方の人』はエマオで終わります。

C：これが遺稿なんですよ。

B：この後死んでいるんですよ。なぜ最後にエマオをもってきたんでしょうか。僕もあそこは好きなんだけれど。

A：ニーチェの権威主義批判と、芥川のそれは同じ形をしているとして、ニーチェと対をなすような思想は入ってこなかったのでしょうか。ニーチェだけを読んでいるはずはありませんよね。

B：やはり最後になぜエマオなんだろうということですよ。ニヒリズムを突き詰めると当然自殺に至るのかなとは思いますが。

A：最後のエマオもそうですが、最初の鏡であるという部分、『続西方の人』の最初の部分です。書き加える必要があるんだということを説明している部分です。再びキリストについて書かねばならないと書き始めて、最後エマオで終わっています。ここも合わせて気になる場所ですね。

B：Dさんは読んでいかがでしたか？

D：すごいニヒリズムだなと感じました。私が気になったのは「ジャーナリズム」です。頻回に出てきたのでどうかなと思いました。

B：前半でそんな話にもなったんです。旧約聖書で出てくる預言者が、今でいうところの世の中のことを記述したりして世の中を批判とか人々に伝えていく形だったということで、ジャーナリストという言葉を使っているのではないかということでした。

C：そうですね。欺瞞を剥ぎ取るというか、政治に関わる人、利権団体とかが真実ではないことを真実であるかのように語る、歪めて語ることを本当はこうなんですと言うという意味では、池上彰がやっていることとキリストがやっていることは似ています。宗教家たちがこうだと言っていたのを、「宗教は本当はこうですよ」と言って憎まれました。キリストの憎まれ方はジャーナリストの憎まれ方と似ています。今の日本でも、池上彰のことを消したい人はたくさんいるはずですよ。そういうことかなと思いました。

B：芥川も当時はそのように見られていたのでしょうか。

C：芥川はどんな立ち位置だったのでしょうか。文化人のような活動もしていたのでしょうか。ただただ文筆家だったのでしょうか。

B：もう少し巧妙だったのかもしれないね。児童文学を書くくらいですから。でも池上彰も書いていますね。

A：芥川は小説や作品によって、様々なものを批評しました。それは小説家同士も新聞や作品によって批判をし合いました。返答する形で寄稿をしたりしました。谷崎潤一郎との論争の中で、『文芸的な、あまりに文芸的な』という文章を書いています。

C：まさにニーチェですよ。

A：青空文庫で見られます。芥川が書いた部分ですね。そこに、詩人兼ジャーナリストの完成のために物語を作っていると書いています。つまり、芥川のなりたい姿は詩人兼ジャーナリストで、その姿をキリストに見たのかと思いました。

B：芥川はいわゆる「詩」は書いていませんよね。

C：「詩」の定義が、文学ということなのかもしれませんね。広義の、言葉の力で勝負するという意味の「詩人」だったのかもしれません。そんな可能性はありますよね。

A：作品を作るのは、自分の人格の完成のためでも、社会組織を一新させるためでもないと考えて書いてあります。自分を高めていくようなことではないのだと思います。

B：社会制度の一新というとマルクスとかを指していますよね。

A：そうではなくて、僕の中の詩人とジャーナリストを完成させるためにと書いてあります。

B：それをこの『続西方の人』に込めて自殺しているんですね。

A：もしかすると、死ぬことによって、そうなると考えていたのかもしれません。死ぬことによって完成されるというようなことです。

B：キリストのようにということですか？

A：キリストもそうです。

B：最後に「彼の一生はいつも我々を動かすであらう」「ジャーナリズム至上主義を押し立てる為にあらゆるものを犠牲にした」とありますね。そういうことかもしれません。キリストもそうだから、自分もそうなんだということかもしれません。

C：そうかもしれませんね。

A：そんな読み方をできるかもしれません。

B：Dさん、ニーチェや谷崎潤一郎は読んだことがありますか？

D：谷崎潤一郎は少しだけ読んだことがあります。

B：僕は絶望的なほど小説が読めないんですね。昔読んでいたんです。筒井康隆とか村上春樹とか読んでいたんですけど、最近は読めません。唯一読めるのは桜木紫乃です。釧路の人です。

A：映画化されるんですけど？

B：ホテルローヤルですね。あれは読めるんですね。何でそれ以外読めなくなってしまったんでしょうか。Dは普段どんな本を読むんですか？

D：最近は、ノンフィクションが多いです。昔は、筒井康隆とか安部公房とか読みました。カフカも読んでいました。

B：筒井康隆はもう狂っていますよね。

D：でも面白いですよね。

B：僕はその狂っている具合が好きでした。

A：SF なんですね。

B：筒井康隆も体調を悪くしたときにハイデガーを読んでいます。『誰でもわかるハイデガー』という本を出しています。『存在と時間』をととてもよく理解してわかりやすく書いてあるようです。

B：話は戻りますが、キリストはジャーナリズム至上主義を押し立てる為に全てを犠牲にした、だから自分もという話なのに、最後はなぜエマオ途上の話が出てくるのでしょうか。

A：ここは想像の話ですが、エマオはキリストが死んだあとの話ですね。よみがえった後の話です。

B：解説をすると、イエス・キリストが十字架にかかって死にます。その後の話で、イエスは復活をしているいろいろな弟子たちのところに現れています。エマオというところに向かっていた旅人がいて、二人で歩いていたはずが一人増えているんですね。そして熱く語っている。

C：先頃あった事件についてですね。

B：そして三人で食事をするんです。食事をするときに後から入ってきた人が、パンを分けようとしたときに、旅人二人がハッと気がつくんです。「これキリストじゃん」って。あのとき自分たちの心が燃え上がるように話していたのは、そこにキリストがいたからなんだ！という話です。そんな件が『続西方の人』に書かれています。つまり自殺する直前に書いたものとしてあるんです。だからそれと絡めると、芥川もそんな思いでやってきたんでしょうか。

A：死後に思い返されて人々の思いを熱くするのがジャーナリズムなのでしょうか。

B：芥川が死んだ横に聖書が置かれていたというのは本当なんですか。

C：わかりませんが、これを書くための資料としては聖書は入ってくるでしょうね。不自然ではないですよ。

B：遺稿…未完ではないですよ？

C：それはわかりませんよね。

B：でも『西方の人』と比較すると長さ的にも構成的にも、これが最後でしょうかね。終わっている感じはありますよね。

A：やはり死というものを一つの完成とみていたのではないかと思います。

B：「死は完成」という思想ってあるんでしょうか。キリスト教は「死」を「完成」とは言いませんよね。死後も続いているイメージですよ。日本の哲学にあるのでしょうか。京都学派とかにありそうですね。

C：ある種の美学みたいなものとしてはあるかもしれませんが。芥川に詳しくないのですが、神経症的に完璧主義なイメージがあります。長い小説は書きませんよね。というのは、完璧を求めているからではないかと思います。芥川の文章の切れ味とかがすごいのは、校正とかをものすごくするんだと思います。書き散らかすのではなくて鋭利にしていくタイプの芸術家です。そういう芸術家は短命な人が多いというのはある気がします。ミュージシャンでもそうです。ジミヘンは事故であったとしても、天才的なミュージシャンが短命であるということはありません。そういう一瞬の煌めきを大切にすする人たちは、老いていく自分を見ていたくないとか、一番文章が上手なときに死にたいということがあるのかもしれませんが。

B：美を追い求めたんでしょうか。当時自殺している文学者は多いですよ。最近だと西部邁くらいですよ。

C：死というものに対する身近さということは当時と今では違うと思います。身近に死がある状態の中で、自殺という選択肢がもしかしたら魅力的だったのかもしれませんが。死ぬんだから魅力的というのも変な話ではあるんだけど。

A：自ら選ぶという点においてですよ。

B：今よりも子どもも多く亡くなっていた時代ですからね。若かろうが老いていようが死ぬことは身近にあったのかもしれませんが。今でいうところの自殺と意味が違うというのはそうかもしれませんね。

B：話が変わってしまいますが、今年4月の自殺者は少なかったはずですよ。震災の時も少なかった

はずですが。

D：減っていると聞きました。

B：その辺を研究した人っているんでしょうか。デュルケームは自殺論を書いていますよね。自殺の類型論、危機があった時、私はいのちの差し迫りがあると呼んでいます。社会全体にいのちの差し迫りがあるときって、自殺を選択しないような雰囲気になるのではないかと考えています。

D：自分の中の危機感と周りが危機状態になることの違いがあるかもしれません。周りが危機状態になると、本能的に生きなきゃとなるのかもしれないなと思います。震災も、コロナも。人は本能的に生きることを感じるのではないのでしょうか。

B：身体障害がある人たちの自殺率とかって調べた人いるんでしょうか。前に生きがいと自殺について考えたことがありました。健常者も障害者も関係なく自死については考えたことがあって、実際にしている人がいるんでしょうか。あまり聞かないですよ。精神疾患は別にして。日々生きること自体が大変なんだという人たちが自殺を選択することには別な前提があるのかもしれないと思うんですけど。

D：自殺すらできないということはあると思うんですけどね。

B：そんな話にもなりましたが、必ずしもそれだけではなさそうですね。

A：芥川に引き寄せると、「あえて選ぶ死」ということでしょうか。

B：ぼんやりとした不安、ということですかね。

A：話は違うかもしれませんが、ニーチェやゲーテも出てきますが、トルストイも出てきますよね。

C：出てきましたね。

A：『続西方の人』の12 最大の矛盾というところ。教訓主義的なとあります。

B：トルストイにはロマン主義的な色彩がないとありますね。

C：トルストイは靴屋のマルチンを書いているくらいだから、そういうキリスト教的な道徳的な話をしていますよね。

B：何でロシアはドストエフスキーとかもそうですが、キリスト教における道徳の基準とか善悪の判断とかあるんでしょうか。

C：ロシア正教は独特なんだと思います。僕の解釈は、トルストイとドストエフスキーのやろうとしたことは厳密には違うと思うのですが、彼らがしようとしたことって、東方教会というものが有効性を失った近代において、それでもキリスト教の本質はどのようにしたら保存することができるのかということ。それを文学でやろうとしたということです。それってまさにニーチェやゲーテが西方教会でしようとしたことと同じなんだと思います。ニーチェは「神は死んだ」という言葉が一人歩きしているんだけれども、本当は違って、神なき世界でどうやって生きるか、信仰を再定義しようとしたんだと思うんです。「神なき世界」というのも、西洋的な世界観の中での話です。「神ある世界」というのは聖なる天蓋と言われるカトリックという父がいて、母でもあるんだけれども、宗教改革後も権威という父はいたんですよ。その聖なる天蓋が無くなった世界で、人はどうやって生きていくのかというのがニーチェの根源的な問いとしてあったんですよね。ドストエフスキーも、ロシア正教ってカトリック以上に形骸化というか形式を重じています。香をたいたりするわけです。東方教会はギリシャ語なんです。西方はラテン語を選びました。イタリアに本部があったわけです。東方教会はカトリック以上に伝統を大切にしてきたから、お経を唱えるようにしてギリシャ語の聖書を司祭が読んで香をたき

ます。ウクライナの教会に行くとなんな感じでした。そうすると、世の中はどんどん変わっていくわけですから「これで神に出会うってよくわからない」って人はなっています。そしてロシア革命の後にそういう機運は高まっていったと思います。そんな中でドストエフスキーは信仰を近代でも保存する為にはどうしたらいいかということを考えてんだと思います。そういう意味ではニーチェが西側でやろうとしたことを東側でやろうとしたということなのかもしれません。

B：ニーチェを勉強したいですね。芥川からのニーチェだとちょっとやばいでしょうか。

A：いつかロシア系も行くべきですよ。

B：でもロシア文学は長いイメージがありますよね。

C：そうですね。めちゃめちゃ長いです。そして読みにくいです。チャーホフとかは短いかもしれませんが。

B：次のことそろそろ考えなくてはいいですね。

A：そうですね。

C：虚無主義ってありますよね。「虚無」をテーマにしているドイツの文学者がいます。ミヒャエル・エンデです。「虚無」が中心的なテーマではないんですけど『果てしない物語』があります。ファンタジーの世界で、虚無が世界を覆い尽くすというモチーフが出てきます。虚無から世界をどうやって救うのかということです。最後、どうやって救うのかというと「愛」だと言うんです。「愛」を求めたんだと。多分、『果てしない物語』は、エンデなりのニヒリズムに対する回答なんだと僕は思っています。そんなことを思い出しました。芥川が子どものために文学を書くくらいだから、子どもたちが小さい時からそんな虚無主義に触れていったときに、それは可哀想だとエンデは言うんです。これは『エンデのメモ箱』で明かされていることなんですけど、それは近代になって神話が貧困化した、それはいわゆる聖なる天蓋が崩れたからしょうがないことなんだけれども、その中でも希望に満ちた神話に子どもたちは触れなければいけないと。僕はそのために書いているんだと。『果てしない物語』の中で、虚無に世界が覆い尽くされそうになるところから主人公は逃げるんです。逃げて逃げて逃げて、そこに希望があって、それは「愛」だと。多分そう言うことなんですよ。

A：今まで続いてきたニヒリズムの後に聞くと心安らぎますね。

B：ダメダメ。安らいじゃダメですよ。(笑) 探究しないとダメですよ。

A：エンデとか良いかもしれないですね。でも青空文庫にはないですね。

B：トルストイ、『イワンの馬鹿』ならありますね。

C：そんなに長くないかもしれません。

B：次が2週目ですか？芥川は3週目ですよ。

A：もう2週でセットはやめようかと思っています。もう3週目なので。そろそろ芥川を抜け出さないといけないですよ。

B：そうですね。どうやって芥川を抜け出すかですよ。芥川に引きずられつつ、どうやって抜けるかですよ。

A：トルストイに行くというのはいいかもしれませんね。もう一つとしてはニヒリズムを批判したものに行くのか。

C：僕は『イワンの馬鹿』すごく面白かった記憶がありますね。

B：僕は読んだことがないです。

A：僕もありませんが、『イワンの馬鹿』って見ますか。

C：文体は芥川よりも読みやすいですね。

B：では、『イワンの馬鹿』にしましょう。行きましたね、ついにロシア文学。

A：やっと芥川から抜け出せそうですね。

C：ニヒリズムはキツイですね。キツイ思想ですね。甘えを許してくれないというか。

B：「虚無」はハイデガーもやっています。「ぼんやりとした不安」はハイデガーの主題でもあります。世界の世界性という部分で、自分のまわりにある道具、それらが意義性を無くした時に人はどこに立っているのかわからなくなると言っています。世界の無世界性というように書いているんです。そんなときに感じる心情が不安だと。「来週テストがあるから不安」というのは「不安」ではなく「恐れ」だと言うんです。不安というのは対象がないと言うんです。自分自身に対するものだと。本来的な心情だから、そこから出発することが本質的であると言っています。

A：いつかエンデもやりたいですね。私は子どもたちに『モモ』を紹介しています。今妻が『モモ』を読んでいる最中です。

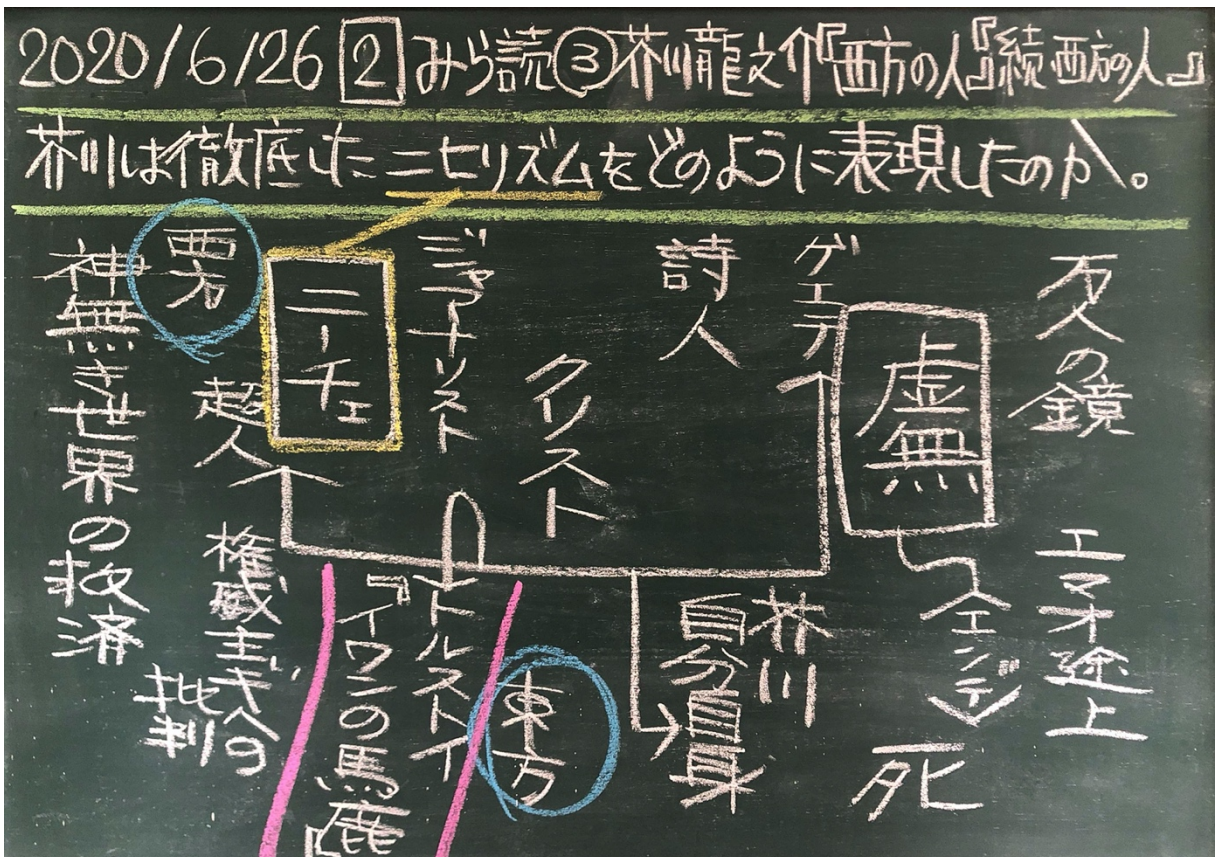
C：僕は『果てしない物語』を読んだときに驚いたんです。『モモ』の焼き直しじゃないんですね。全く違うところから物語を立ち上げている。そしてそれが面白い。こういう作家ってあまりいないなと思います。代表作ともう一つがあって、それが全然真似ではないということです。

B：じゃあ、次はロシアですね。ちなみにDさん、最初はカフカの『変身』だったんですよ。何考えているんだっていうスタートでした。

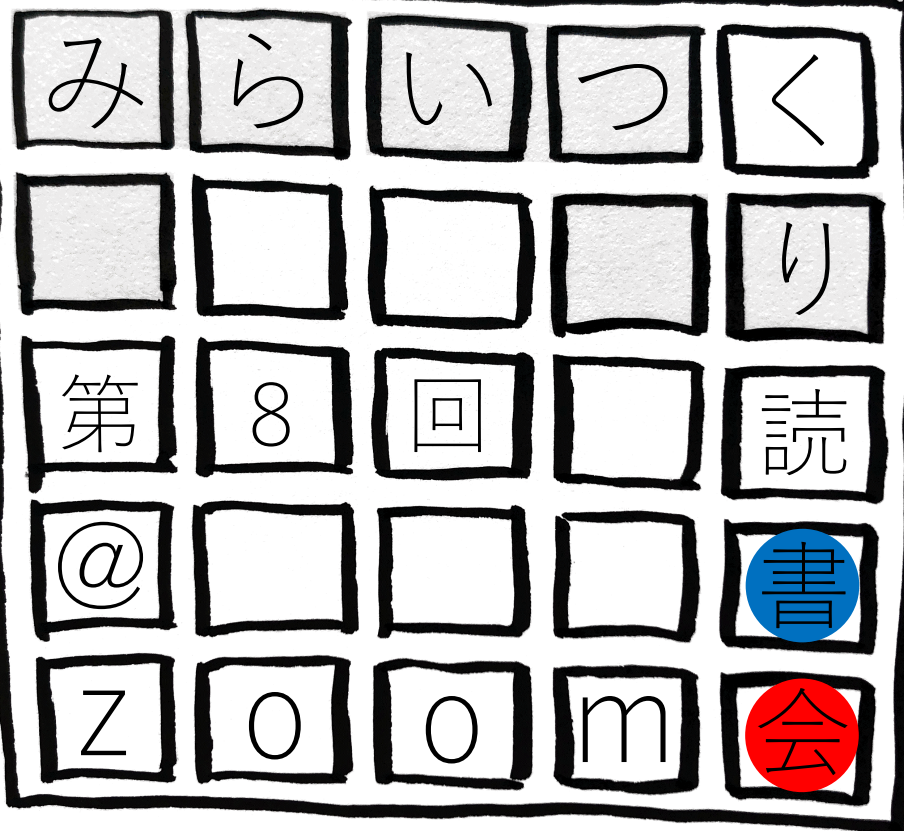
D：面白いですね。

B：次はロシアということで。次回は10日ですね。

A：10日の10時からということでお願いします。



※第〇回がわかりにくくなってきたので、
今回から通し番号で記載することになりました。



- ・ 課題図書を読んでお集まりください。
- ・ 第8回は感想を中心に議論し「再読のための問い」をつくります。
- ・ 第9回ではその問いに沿った議論を行います。

【日時】

2020年7月10日(金)10:00～11:00

【課題図書】

トルストイ『イワンの馬鹿』 菊池寛 訳
「小学生全集十七巻 外国文藝童話集上巻」 文藝春秋社
1928(昭和3)年12月25日発行
※青空文庫で読むことができます。

【参加方法】

興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所 松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

みらいつくり大学校企画

第8回みらいつくり読書会@zoom 記録

第9回は、2020/7/31の10:00~11:00に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
トルストイ『イワンの馬鹿』	2020/7/10 10:00~11:00	A,B,C,D

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：今回から、1週目に問いをつくって、2週目にそれについて再読をして追求するという流れを、そのまま続けるか迷っています。こないだの芥川を読んだ時には、問いをつくりつつ、つまり視点を共有しつつ新しい本を読んでいくということもしてみました。それが面白かったなと思います。特に今集まっている四人に関しては、前回も同じ経験をしていいますので、問いを立てるとかいうことはあまり考えすぎず、でも後半では次回につながるような視点に絞っていきたいとは思っています。次回トルストイでなくても良いですし、もう一度同じ作者作品である『イワンの馬鹿』を読もうとなっても良いと思っています。それでは感想からいきたいと思います。

B：誰からいきますか。

A：私からじゃあ。すごく面白く読みました。楽しかったし、トルストイは何を批判しようとしているのか、と読みました。私は芥川を通してそんな本の読み方を身につけたんだなと感じました。この本に出てくるシモンとタラスの、兵隊とお金というものの際限の無さ。それは多分資本主義なんだろうなと思いました。それらを批判しつつ、イワンに表されている「労働観」、「労働の尊さ」がテーマだと思いました。物語の途中から「馬鹿」という意味が変わってきますよね。それを面白く読みましたし、最後のオチでマルタが出てきます。「つんぼでおし」のマルタです。マルタがオチに使われていることもユニークだなと思って読みました。簡単ですが、際限のない資本主義におけるお金・土地などを所有していくことへの批判が込められているのかなと考えながら読みました。

C：私はこの本読んだことはなくて。それを主人に話したら、「この本って三匹の子豚だよ」って。「昔読んだ時に三匹の子豚の記憶がある」って言われました。すごい例えだなと思いました。確かに兄弟で、コツコツしているのと、楽観的に考えて行動しているお兄ちゃんたち。そういう捉え方だったなと思いました。この本を読んだ時に、あの人を思いました。小畑さんです。知っていますか？ポランティアの。

B：スーパーボランティアのね。

C：そうです。スーパーボランティアの小畑さんです。子どもを助けた時に多分すごい匂いがしたんだと思うんですよね。「お風呂入ってください」「ご飯食べてください」と言われたけれど、小畑さんは「風呂も入らないし飯もいらない」みたいに言っていて、今も熊本の被災についても気にかけながら自分がある大分で自分ができることをコツコツとやっているようなんです。そういう自分の目の前の労働とか働くということに対して、信念を持ちながら続ける。それは信念ではなくて人間として当たり前のことなのかもしれませんが。それにああしたいこうしたいあれが欲しい、こんなものが食べた

い、こんな服がきたい、という欲が混じって、そういう発想になっているのかもしれませんが。この本は、人間ももとは働いてご飯を食べるってことなのかな、と気づく話だと思いました。私も面白い話だと思って良い風に捉えて終わりました。以上です。

B: トルストイは初めて読みました。ロシア文学はきっちり読んでみたいと思いつつ、読めないというか、『カラ兄』とかから行っちゃうからいけないのかもしれないんですが、何回もチャレンジしているけど、一冊目で読めないみたいになっちゃって。今回短いから読み切れました。めちゃ面白かったです。Aくんと同じで、芥川を読んだ後だからか、割と「どういうことを比喻としているのか」ということを考えながら読みました。もちろん資本主義批判みたいなことはあると思うんだけど、それだけじゃないんだろうなと考えています。だから今日議論を通して見えてくるものがあるんだろうなと思って楽しみにしていました。一つは、キリスト教的なベースで考えているんだろうなと思うと、三人というのは別かもしれないけれど、「荒野の試み」を思い出しました。イエスは神様の息子です。そのイエスが公的な生涯を歩む前に、荒野という何もない砂漠のようなところにいると、悪魔が出てくる。そして悪魔から試みを受けるという話があるんです。新約聖書にあります。その中身と似ています。悪魔が出てきて、これを何にでも変えてやるぞと誘惑する。イエスは拒否します。そこから有名な「人はパンのみに生きるにあらず」という言葉ができました。日本語にすると「人はご飯を食べるだけのために生きているわけではない」という意味の翻訳に見えるけれど、「変える」ということがそうではないと。暴力とか、支配するとかいうものを退けて、悪魔の試みに打ち勝って初めて神様のことを伝えられるようになるんだというようなことを言っています。そんな内容と重なりました。試みられるというか、やはりここでも悪魔が出てくる。試みられている内容が類似していると思いました。あとは前回の芥川の延長で、今ニーチェを読み直しているのですが、今はアメリカ人の学者が書いた『生の肯定』という本を読んでいます。ニヒリズムの克服について書いた本です。ニーチェのやろうとしたことは、価値転倒というか、それまで素晴らしいとされてきた、お金とか、道徳とか、「こうしなければならない」「こうしてはいけない」とかいうものを、全て転覆させることだったとありました。この話も似ているのかと思いました。イワンは「馬鹿」と言われています。後半になるとむしろイワンの馬鹿さが本質なんだ、と読んでいて思うようなつくりになっている。兄たちが重きを置いている価値よりも、馬鹿と言われながらイワンが重きを置いている価値の方が、圧倒的に正しいと思ってしまう。また、キリスト教的だと思ったのは、聖書の中にある「放蕩息子の例え」とのつながりも感じました。イワンは徹底的に「いいよ」と許します。トルストイがどのような思想のバックグラウンドがあったかはわかりませんが、キリスト教でいう愛を表現しようと思って、イワンを描いていると思いました。途中から、イワンがイエスをモデルにしているのではないかと思ったくらいでした。

D: 勘違いして、この本を以前に読んでいたと思っていましたが、それは『イワン・イリッチの死』でした。初めてでしたが面白く読みました。まず調べてみると、『イワンの馬鹿』は、ロシア民謡に繰り返し登場する人だとありました。なので『イワンの馬鹿』にはいろいろなパターンがある。そのうちの一つ、トルストイのバージョンがこれのようです。『イワンの馬鹿』は英語だと「Iwan The Idiot」ですよ。まさに『Idiot』と言うタイトルでドストエフスキーが書いている作品があります。『白痴』です。多分、ドストエフスキーは『イワンの馬鹿』の別バージョンとして『白痴』を書いたのだろうと想像しました。『白痴』も読みましたが、これは知恵が遅れた人が聖人であるという話です。『アルジャーノンに花束を』のモデルに『白痴』の主人公があると言われていています。頭の弱い聖人の人です。もう

一つ面白かったのは、三人兄弟の構成です。姉妹も一人います。武闘派の長男と、金持ちの次男、無垢な三男。これは『カラマーゾフの兄弟』と似ています。『カラマーゾフの兄弟』は、長男は腕っ節が強く、次男が屁理屈、三男が聖人のように純粹です。カラマーゾフは未完の作品ですが、第4部で、ドストエフスキーはおそらく三男をキリストとして描こうとしていたと言われていました。これとも類似性があると思いました。もう一つ思い出したのは、ジャック・アタリの『21世紀の歴史』です。これから21世紀に3つのことが起きると言っています。彼が起こると言った一つ目が「マネーによる暴力」です。資本主義が極地にいった時に格差が広がり、そして金持ち、グローバル企業はおそらく民兵を雇うようになるだろう、と。その軍隊の方が国の軍隊よりも強くなった時に、露骨な暴力が発露すると。マネーの暴力の次には、本当の軍隊による暴力が人類を蹂躪するだろう、と言っています。ジャック・アタリはユートピア主義なので、その後には人類愛に根ざすような本物の民主主義が訪れるであろうと言っています。この三つの構成は、三兄弟で言うと、まず次男的なもの、そして長男的なもの、そして最後にイワンの馬鹿的な世界になるということです。それとも似ていると思いました。

A：先ほど話した「何を批判したか」という読み方と同時に、「何から影響を受けたか」ということも考えながら読みました。私も聖書が明らかにこの背景にあると思いました。荒野の試み、放蕩息子の話です。でも悪魔については、トルストイは非常に滑稽に描いています。圧倒的な力をもつ悪魔ではなく、ちょっとお馬鹿な悪魔です。最後の頭を使って働くという駄洒落のような面白さもありました。

D：僕は芥川の『犬と笛』にも雰囲気、構成が似ていると思いました。

C：確かに似ていますね。

B：似ていますね。

D：悪魔が超自然的な力を授けるところです。芥川が、こういうものを真似てみたことは十分ありえると思います。芥川が、トルストイを読んで、日本の子どもたちに向けて書く時に、日本的な解釈を加えて表現した可能性はあると思います。

B：日本語訳も最高なんですよね。非常に素晴らしいんだろうなと思って読みました。

D：タラス王、次男を悪魔が滅した方法も面白かったです。これはハイパーインフレのことですね。金を配ったら金の価値がなくなったという話です。日銀の異次元緩和です。これからの日本を預言しているのではないかと思います。悪魔が日銀になったという話ですね。

B：王が出てきますよね。主題となる人たちとともに、王が出てきます。芥川の『犬と笛』もそうでしたが、支配している人が登場し、そこからの見方が物語として用いられています。今回はタラカン王が登場します。また、なぜ印度だったのでしょうか。西方から印度に攻めると聞くと、アレクサンダー大王を思い出します。なんでインド王なんだろうと思いました。

A：他国、違う国で戦争をする相手と考えるとインド、というように捉えられていたのでしょうか。

D：地理学的には中国を挟んでいますからね。

A：確かに、インドではなく中国でも良いはずですね。

B：なぜインドなのか不思議に思います。アレクサンダー大王の時代にはインドは強大でしたよね。でも紀元後はあまり世界史に登場しないように勝手に思っていました。ロシア的には、モンゴルの方が驚異だった気もします。ロシアは支配された歴史を持ちませんよね？

D：そうですね。モンゴルに一時なったことはあったはずですが。モンゴルとの混血は進んでいるはずですが。

B：あの時代は全世界がモンゴルの影響下にありました。圧倒的な強さでしたからね。

A：トルストイのイメージしていた資本主義に対する思想を社会主義とって良いかわかりませんが、トルストイがイメージする社会主義国家は、後半に出てくるイワンの国のようなものだったのでしょうか。

B：僕は社会主義を表現しているとは思いませんでした。

D：この本が書かれたのが1886年です。これはロシア革命の前です。共産主義化していないロシアです。話が逆のような気がするの、ロシアにはそもそも土と結びつくと言ったような思想があります。日本でいう農本主義のようなものです。伝統的なものです。「土とともに生きる」、「土地」と「血」がロシアのアイデンティティです。それがあったからこそ、マルクス主義が入り込みやすかったと考えた方が筋は通ると思いました。全世界にマルクス主義が根付く可能性はあったはずですが、なぜか中国とロシアで根付いたのは、中国とロシアにそもそもそのような素地があったと考えた方がいいのかなと思いました。

B：そういうことをエマニュエル・トッドが言っていますよね。『世界の多様性』だったかで書いています。あの本は結構好きでした。その国の伝統的な農村の家族世帯と、その後その国が政治的にどのようなイデオロギーをとるかについて分析した本です。ロシアは、伝統的な農村だと、共同体社会で、結婚した後も、みんな大家族で住んでいます。そういう国が社会主義を選択していったという話でした。その中にある大家族で暮らすということは、農業、つまり集団でその場でする活動をしているからということがありますよね。

A：つまり、トルストイがしようとしたのは、生まれかけの資本主義に対して、すでにある「手でものを作る」と言ったようなロシアの農本主義に戻ることであったのでしょうか。

B：そのように読めますが、本当にそうだったかはわかりませんよね。

A：普通に読むとそうですよね。

B：でもそういう風な人たちを馬鹿にする背景があったのかもしれませんが。「あいつはただ農業やっているだけじゃん」というようなことです。「もっと効率的に儲けることをすべきだ」というような話です。

D：力の源泉がどこから来るのか、という話でもありますよね。金から来るのか、それとも武力・軍事力から来るのか、『イワンの馬鹿』の筋書きでは、それは「労働」からくるんだというのが結論です。ここには「非暴力」というテーマもあります。軍隊に対して抵抗をしないから、軍隊は蹂躪することが馬鹿らしくなるくんだり描かれています。

C：韓国の映画でありましたよね。農村で武力を知らない農民たちが、たまたま入ってきた兵隊の鉄砲を見ても驚かないで兵隊を受け入れていく話です。

B：ファンタジーっぽい映画ですね。韓国でもそういう話は人気があるのでしょうか。Netflixで韓国ドラマの『アスダル年代記』があります。あの中にもそのような村が出てきます。いわゆるユートピア的社会です。ここでは武力を使わない、そこに外からアスダル国が侵入してきて奴隷として捉えていくんです。戦いを知らないその部族がどのように翻弄されるのか、でもその中の娘の一人がアスダル国の王になるという話です。つまりそのような話は普遍的にあることなのかもしれません。

D：最後に、悪魔の親分が塔のてっぺんで演説を始めます。悪魔が、いかに手を使わないか、頭を使うかを説いたところ。でも人民たちはその意味が分からなくて帰っていきます。今この時代にとっ

て大切なことだなと思いました。『金持ち父さん貧乏父さん』という本があります。ロバートキヨサキが書いています。彼はランプの親友です。同業者で共著を出しています。彼らは不動産を転がすことでお金を儲ける人たちです。一億円で買った不動産を二億円で売って、利益を上げることに快感を覚える人たちです。僕にとって『金持ち父さん貧乏父さん』は世の中で一番嫌いな本です。本当につまらなかった。なんで人気があるのかはわかりません。本当にひどい。「まず貧乏父さんの話をしよう」とプロローグが始まります。「大学を卒業して四十何年間高校教師としてコツコツと働いたお父さん、君はこんな人になりたいかい？」と書いています。僕はなりたいたいです。

C：なりたいたいですね。

D：「じゃなくて『投資とか株とかの利益で儲けて南の島でテキーラを飲む』こっちになりたくないか？」というんです。僕はなりたくないです。導入から入っていけない。『イワンの馬鹿』で書いてある悪魔の方法です。「頭を使って手を使わないで働く方法を教えてやるぜ」ってことです。そういう人たちの人気があることの方がおかしいと思っています。イワンの国の人たちがばかばかしい話だと思って帰っていったのは健全な話だなと思いました。

B：最後に年寄った悪魔が、結局塔から落ちて頭を打ちます。今話していたことに価値を置くということがいとも簡単に崩れ落ちるんだということを書いていますよね。そして毎回、悪魔が倒れた後には、穴が残ります。毎回です。この穴は何を喩えているのでしょうか。トルストイは「穴が残りました」と書くんですよね。

C：消えてなくなってもいいはずですよ。

A：「頭を使って効率よく手は汚さない働き方」と「シモンとタラス」はイコールではありません。似ているけれど同じではありません。結びつきやすくはあるけれど、違うものです。

B：兵力は他者を支配する、コントロールする力ですよ。お金は所有することです。他者を支配しようとする欲と、より多くを所有しようとする欲を代表して、二人の兄を書いていると思いました。イワンはひたすら真面目に働きます。そんな武力とかお金に頼って生きようとして悪魔に唆された兄にも分け与えます。いわゆる私的所有をイワンはしません。当時価値があるとされていたものを持たない人を、みんなは馬鹿と呼んでいるかもしれないけれど、そちらに真理があるんだということだと思います。

D：悪魔の退散の仕方が、僕は信仰者として面白かったです。「神様の祝福がありますように」と言った時、悪魔が神の名によって死にます。4回それがありますが、そのどれも、イワンは悪霊を退散させようとしているわけではありません。そこが面白いと思いました。悪魔に対抗するというのは、神に従って生きることの副産物であって、退散させるために御名を唱えたわけではありません。神を敬う挨拶を無意識にしたことが意図せずして悪魔を退散させたんですよ。それは僕らの信仰者としての生活にも言えると思っています。「悪魔よ去れ」という祈りがあります。したらいいとは思いますが、でもそれ以上に神を敬う生き方をしていたら、僕らが期せずして悪魔は退散していくんだなと思いました。

B：そうすると悪魔自体も、人と同じ価値観をもっているというように描かれていますよね。年寄った悪魔は「キリスト様の名によって何かを与えられることはできないことでした」とあります。なのでこんなに金はあるぞと言いながら、ひもじい腹を抱えて横になったとあります。人間から見ると、悪魔を外的なものとして描いていないのだと思います。そういう欲望を持った人間の例えとして登場させ

ています。ロバートキヨサキ的な悪魔です。悪魔が来て「こんな父さんになりたくないだろ？」と話すということです。

C：でも逆に『金持ち父さん貧乏父さん』を読んではみたくありません。

D：すごく売れていますからね。

B：最初にAくんが言っていましたが、最終的に彼らのご飯を食べられるかを判断するのが「おしでつんぼ」の娘ですね。手がゴツゴツしているかどうかを判断します。

A：最後に目が見えなくて耳が聞こえない障害者が描かれているのも面白いですね。

B：マルタは目も見えないんですか？

C：耳が聞こえないだけだと思います。

D：手で触って判断しているから、目が見えないのかとってしまうけれど、そうではないですね。「つんぼでおし」は今ではあり得ない表現ですね。

A：絶対だめですね。

B：目は見えているんだから見ればわかるでしょうと思うけれど、それでも手で触って判断しているんですね。そこをよく考えるとなんでだろうと思いますね。

A：「おしでつんぼ」はそういうことですね。

C：昔は「みみつんぼ」という言葉がありました。

D：今ラジオでそれを言ったらもうラジオ局が潰れるでしょうね。

B：障害差別は言葉から生まれるというのはそうだと思います。表現する言葉がなければみんな同じように差別はしないと云いますね。

A：ここでは、「つんぼでおし」という言葉を使いつつ、マルタはむしろよく知っている人として描かれています。

B：最初はよくわからないまま進みますよね。イワンの馬鹿みたいになりたくないでしょ、と言われながら、読者はそうじゃないでしょと読みます。

D：僕は『イワンの馬鹿』の思想性に、すごく賛同するんだけど、あえて批判をするならと考えました。ヨーロッパにはもちろんですが、ロシアにもユダヤ人差別があります。ユダヤ人を差別することはローマ帝国時代からずっとあるんですね。キリスト教が国教になってからは、キリストを十字架につけた民族とされて、マルチン・ルターもユダヤ人差別に加担したと言われていました。ロシアでもポグロムと言うユダヤ人虐殺が起きています。ヨーロッパにいられなくなったユダヤ人は結構ロシアに逃げています。ウクライナとかは結構多いのですが、ウクライナでもポグロムがありました。歴史は繰り返されていて、この時代にもあったはずですよ。ヨーロッパにおけるユダヤ人差別って、直接的には土地を持ってないということと、普通の商売をさせてもらえないということがあります。だから彼らは苦し紛れに金融業を始めました。だから今の金融業の世界的な大手であるロスチャイルドとかの財団がユダヤ系です。銀行のルーツがユダヤにあるというのはそういう事情があります。そんなことを考えると、最後に出てくる紳士を、ユダヤ人と読み込む当時のロシア人はいたのかなと思いました。最後にユダヤ人を馬鹿にして終わるといった話だとしたら、怖い話になりますね。

C：怖いですね。

B：次以降ですが、ロシア文学をもう少し読みたいですね。でもトルストイは青空文庫にはあまりありません。

A: 同じ時代のロシア文学を読むと当時あった農本主義的な思想や資本主義に対する思想がわかるかもしれせんね。

B: でも他の作品は『イワンの馬鹿』の2倍3倍くらいありますね。残念ながら『イヴァン・イリイチの死』がありません。ロシア文学だと、チェーホフはありますね。短いのでしょうか。

D: 長いイメージですね。舞台劇がありますね。短い子ども向けもあります。

B: ドストエフスキーもありますね。『百姓マレー』があります。これは短いですね。

A: 青空で選ぶのもいいし、青空ではありませんが『イヴァン・イリイチの死』でもいいですね。

D: 青空縛りを外せばそうですね。

B: 『イワン・イリイチの死』は、岩波と光文社の古典新訳文庫がありますね。『イワン・イリイチの死』読んでみたいですね。有料ですけど。

C: そうですね。図書館にも行けるようになりましたし。

B: では、『イワン・イリイチの死』を、岩波でも光文社でもどちらでも良いということにしましょうか。

D: ガンジーは、トルストイに最大級の影響を受けたとあります。だからそう考えると、非暴力ともつながっていますよね。

A: 『イワン・イリイチの死』がどのようなテーマかはわかりませんが『イワンの馬鹿』で示されたような「労働」とか「資本主義批判」といったことを念頭において読むことにしましょう。

B: 全然テーマは違うようです。死について考えるというようなことのようにです。

A: 次は7月31日にしましょう。お疲れ様でした。

